

大伴家持歌の風流
— 雪月花 —

森

斌

広島女学院大学総合研究所

2009年12月

大伴家持歌の風流
— 雪月花 —

森

斌

目次

序章	1
第一章 雪の歌	
はじめに	12
一 万葉の雪	16
二 夏と秋の雪	21
三 冬の雪	25
四 春の雪	27
五 正月の雪	32
結び	36
第二章 月の歌	
はじめに	39
一 月の歌	40
二 習作時代	44

三	越中時代	53
四	少納言時代	60
結	び	65

第三章 花の歌

はじめに	68
一 習作時代	71
二 越中時代	77
三 少納言時代	85
結	92
び	

表

万葉の雪歌	97
万葉の月歌	98
和歌引用索引	(1) 101

序 章

「風流」(みやび)とは、万葉集で石川女郎と大伴田主の贈答歌(二・二二六、二二七)に「遊士、風流士」とある。もちろん男女の機微がここでは主な「風流・遊」の対象である。大伴坂上郎女の歌にも「風流」(四・七二二)が用いられているが、山にいうことで風流でないという。一般的に都にいて粹人であることが「風流」の基本であった。かかる意味で「風流」という漢語が万葉で用いられているが、ここでは「雪月花」の「風流」にも使用した次第である。

大伴家持は、孤愁の歌人と評価されている。その歌言葉である「ひとり」「いふせし」「くれなゐ」には家持歌の本質を貫くものがあり、二月と三月にそれらの歌が多く詠まれているところから春愁歌人の評価も高い。その一方で心のかげりを含みつつ雅な雪月花に対する興味も、家持は示している。注目したいのが、家持三十二歳の天平勝宝元年十二月に、

宴席に雪、月、梅の花を詠める歌一首

雪の上に照れる月夜に梅の花折りて贈らむ愛しき児もがも(十八・四一三四)

とうたった越中の守として四年目の歌である。

それは「雪月梅花(花)」を組み合わせた嚆矢である。中西進氏と伊藤博氏は、この家持の題詞を雪月花の始まりとしてもよいとする。^(注)或いは、今井肇子氏は、詠物の新しさであり、「結局『愛しき児もがも』という恋愛感情への転化

が越中の地で宴に集う者が共有しうる願望^(注2)」をこの歌から帰納している。そこで第一章は雪の歌を、第二章は月の歌を、第三章は花の歌を考察する。

まず「雪月花」という熟語は、白楽天の詩を漢和辞書では初出例としている。国語辞書では和漢朗詠集の「交友」にある「琴詩酒の友皆我を抛つ。雪月花の時に最も君を憶ふ」を初出例にする。家持の題詞では、「花」が「梅花」になつているが、そもそも「花」とは、咲くものを指すのであろうから、梅も花と言うことになる。

雪と梅、梅と月夜は、家持を含めてそれ以前にも歌の世界でしばしば試みられている。白楽天と異なるのは、雪と月と花が並列に扱われていることと詩にある「最も君を憶ふ」という箇所である。家持には、そのような「君」である明確な対象がない。自然に「愛しき」誰かを思つて雪月花をうたっている。

雪と梅を詠んだ歌人では、父大伴旅人が先駆的な代表である。天平二年に大宰府で開かれた梅花の宴でも旅人作を含めて三首(五・八二二、八二三、八四四)が梅と雪の組み合わせをうたう。梅と月(夜)ということでは、家持の一例を除き、四例(八・一四五二、一六六一、十・二三三五、一三四九)である。巻十の二例は、「花を詠める」「花に寄せたる」と題詞にあり、冬の雑歌と相聞に収められている。

万葉集では暦の月と雪に触れる例があるが、天体の月と雪の組み合わせでは、長歌三首(三・三二七、五・八九二、十三・三四二四)を除くと短歌では家持の一例だけである。長歌の月と雪は、全体として有機的な繋がりがあつても、家持の歌のごとく雪と月とを組み合わせた写実の情景を、或いは雪と月に基づく心情的な状況を、長歌が表現したのではない。

ちなみに懷風藻では、雪、月を用いた詩は、荊助仁の「美人を詠む一首」に「洛浦廻雪霏ぶ。月は泛かぶ眉間の魄」(三四)とあつて、洛水の神女のごとく雪に舞い、眉間の美しさは月の光のごとくである、という。或いは、境部王

の「長王が宅にして宴す一首」に「上月淑光輕し。雪を送りて梅花笑み、霞を含みて竹葉清し」（五〇）とある。上月とは、正月になり月の光が軽やかであるということであり、雪によって梅の花が開き、春霞によって竹が青々としてゐる、という。荊助仁も境部王も、直接雪見や、月見と関わるわけではない。言葉として、月、雪が用いられている。むしろ、坂部王は、一首には上月に主眼があり、さらに雪が梅の開花を促すと言うが、一応雪月梅花の語を含んでいる漢詩ということになる。

万葉集では家持以外に、雪と月とが結びつく例が案外見出し難いのである。古今集では坂上是則の歌に、雪と月の組み合わせがある。

あさばらけ有明けの月と見るまでに吉野の里に降れる白雪（六・三三二）

古今歌のこれは、有明の月が出ているかと見間違ふ吉野の白雪であるというのであつて、月が実際に景物として存在していたわけではない。神無月と雪は二例あるが、家持のごとく天体の月と雪の組み合わせは、古今集にもない。

ここに至れば、家持は極めて独自の和歌世界であつたことになる。雪、月、梅がそれぞれ実際に存在していて、それを組み合わせた写実の一首である。かかる歌は、万葉集唯一の存在である。

但し、桜井満氏は、雪・月・梅の花を詠んだ「いわば物名の類で、類型的であるが、清らかな夜景が表現されている」とする。^(注3)類型的であるのは、その後の雪月花をめぐる歌の誕生がなせることであり、雪月花うたう和歌の嚆矢とすれば、文学史的に注目すべき歌と言うべきであろう。

和漢朗詠集の最後に引用された和歌は、次の歌である。

しらしらしらけたるとし月影に雪かきわけて梅の花をる（八〇四）

家持と異なり、頭髮が白くなつたとして、月、雪、梅が続く。この歌の先蹤になつたという意見は、家持の歌が雪月梅花をうたっているからである。白楽天の雪月花にも、人生の年輪を感じさせる雰囲気がある。しかし、家持は越中の守として将来を「愛しき児もがも」いうのであるから、まだまだ若々しい。

さて、古代文学で月と雪が案外結びつかないのは何故であろうか。雪が降る月夜は美しいものである。もちろん雪が降っていれば月はぼんやりしているか、雪雲で見えないことが多いのであろう。しかし、雪が積もっている月夜は風流なものである。ところが、案外月と雪の結びつきが歌でうたわれていない。坂上是則の歌からは、雪明かりが月明かりと重なるからとも考えられる。即ち、雪夜には月があまりに近い存在なのであるということが古代人の感覚であつたのかも知れない。

新古今和歌集になれば、雪と天体の月の結びつきが案外あつて、四首（二三、二四、三八八、六七七）にうたわれた。万葉集や古今集の時代では、やはり月夜の雪見などは歌にまだうたわれなかつた。

さて、家持は積極的に植物を歌に取り入れた。四百七十三首中では一首中に三種の植物を詠んでいるものもあるが、歌の数としては二百二十首程である。家持全歌の約半数は植物と関わる。その中でも越中時代は積極的であつた。十七種は越中だけでうたわれた。また、かたかこ（片栗）、ほよ（寄生木）、つまま（タブ）、あしつき（川モズク・葦附海苔か）、すもも、もも、ゆりをうたう歌は、今日的な評価が与えられている。その他として、ふぢ、あやめ、やなぎなども越中で詠まれた植物である。

植物の一般的な呼び名と言うことからは、はな、き、くさ、もみちの言葉を除くと、そのいずれの時代にも共通している固有名詞の植物名は、九種類である。習作時代にのみうたわれた植物が七種類、少納言時代にのみうたわれた植物が八種類であることから、越中時代にのみうたわれた植物が十七種類を数えるのは、それぞれの時代でうたう植物の種類に違いがあることになり、また歌数に比例していることにもつながる。

即ち、越中時代の家持は、植物にも北国の風土の特徴が現れている。一方習作時代の特徴と少納言時代の特徴を植物で言えば、それぞれあじさみとたけと言うことになる。一方作家として二十数年間をとおしていつも用いた花を主眼とする植物と言えば、うめ、なでしこ、はぎということになる。

さて、この論では、雪月花の歌を考察する場合、習作時代（十五歳から二十九歳）、越中時代（二十九歳から三十四歳）、そして少納言時代（三十四歳から四十二歳）という区分に配慮して論述している。

まず越中時代の歌詞で注目したいのは、「春の花」と「秋の花」である。もちろん「春花」は、人麻呂の歌に詠われている。全十一首の中、人麻呂二首（二・一六七、一〇四七）、作者不明一首（一〇・一八八六）、家持八首である。ちなみに岡内弘子氏は、「春花」が日並皇子挽歌（二・一六七）で使用されていることから、春に咲く花が生命力に満ち、秋の豊饒を確信させるとして、人々が待望することから「貴し」の枕詞になった、としている。^{（注4）}

家持はなでしこを盛んに相聞歌で用いた最初の歌人の一人である。島田裕子氏は、なでしこが習作時代に花の可憐さが女性を連想させ、さらに越中・京では社交的な挨拶の花としていて、「私的な相聞歌から宴席歌へと場の変化の相を見ることができ」とする。^{（注5）}

越中でうたったほよ、かたかご、すももは、一首にのみに創作された。一方京師では繊細な「いささ群竹」に吹く風に心を託した春愁の歌人である。また、橘諸兄を譬喩するたちばなを好み、父旅人の好んだうめを愛で、万葉の一

般的な人と同じくさくらに親しんだ歌人でもある。

万葉集巻五には、梅花の短歌三十二首（八一五から八四六）が纏まって収録された。しかし、そこでは一首も香りの魅力をうたう歌がない。一方、古今集巻一春には、三三番から四八番まで連続してうめの歌ばかり十七首がある。それらには、花の色の魅力を認めているが、ほとんどが花の香りに注目している。むしろ花の香りに触れないのは、例外的な四首だけである。

万葉のうめの歌は、百十九首を数える。はぎの歌の百四十二首について数が多い。^(注6)しかし、梅香は二首（八・一六四四、二十・四五〇〇）に詠まれただけである。そもそも「紅にほふ」という家持が創始した歌詞も、紅が紅花という植物から採取するが、「にほふ」は紅の色彩に用いられていて香りにその歌語を用いた歌で触れることが極めて少ない。くそかづらという植物も、その匂いからの命名であっても、「くそかづら絶ゆることなく」（十六・三八五五）と「絶ゆ」を導く序詞に利用されているだけである。

香りを表す万葉の歌語は、「か」「かをる」「かくはし」「にほふ」がある。家持は花の香りを積極的にうたった万葉歌人である。古今集にうたわれた香り文化の先駆的な意味でも注目される。花香ばかりか、袖にまで染みこませる匂いを歌にうたった万葉歌人である。袖の香りということでは、先駆者としては、「扱き（い）れ」とうたう作品があった三野石守の梅の歌（一六四四）がある。この人の歌は、大伴旅人の従者であり、家持にも当然知るところであろう。ふじをうたう歌（十九・四一九二、別案四一九三）は、島村良江氏が香りに触れている。^(注7)

大伴家持は、万葉集最大の歌数を誇っている。四百七十三首が家持の歌数である。家持は雪、月、そして花をいかに詠んでいるのか。それぞれの考察で歌の特質を明らかにする。

大伴家持歌の年代については、中西進氏の『大伴家持 万葉歌人の歌と生涯（1〜6）』に負うものである。この論の

基本に、習作、越中守、少納言と三期に分けて論じているが、天平宝字三年以降も生きているので、万葉集以後を加えた略伝を示す。

I 習作時代(百五十八首)

養老二年(七一八)

誕生

十四歳(天平三年)

父旅人没(享年六十七)

十五歳(天平四年)

処女作(八・一四四二)

十六歳(天平五年)

叔母坂上郎女と贈答(六・九九四)

坂上大嬢に贈る歌(八・一四四八)

十九歳(天平八年)

秋の歌四首(八・一五六六から一五六九)

二十一歳(天平十年)

七夕(十七・三九〇〇)

大嬢との再会(四・七二七、七二八)

妾の死(三・四六二、四六四から四七四)

二十三歳(天平十二年)

内舍人家持初出(六・一〇二九)

二十七歳(天平十六年)

安積皇子の挽歌(三・四七五から四八〇)

II 越中国守の時代(二百二十三首)

二十九歳(天平十八年)

越中宴席の歌(十七・三九四三)

三十歳（天平十九年）

弟書持の挽歌（三九五七から三九五九）

大病を患う（三九六二から三九六四）

歌友池主との贈答開始（三九六五、三九六六）

家持三賦開始（三九八五から三九八七）

放逸した鷹を詠む（四〇一二から四〇一五）

三十一歳（天平二十年）

諸郡巡行の歌（四〇二一から四〇二九）

田辺福麻呂の饗宴（三八・四〇三七、四〇四三）

三十二歳（天平感宝元年）

平栄の饗宴（四〇八五）

出金を祝う（四〇九四から四〇九七） 従五位下

（天平勝宝元年）

雪月花（四一三四）

三十三歳（天平勝宝二年）

卷十九巻頭歌群（十九・四一三九から四一五〇）

旧江四部作（四一五九から四一六五）

三十四歳（天平勝宝三年）

悲別の歌（四二四八、四二四九）

III 少納言以降（九十二首）

三十五歳（天平勝宝四年）

天皇賛美（四二六六、四二六七）

三十六歳（天平勝宝五年）

三絶（四二九〇から四二九二）

三十七歳（天平勝宝六年）

七夕（二一・四三〇六から四三一二）

三十八歳（天平勝宝七歳）
防人を詠む（四三三二から四三三六）

花香の庭（四四五三）

三十九歳（天平勝宝八歳）
族を喻せる（四四六五から四四六七）

四十一歳（天平玉字二年）
正月内裏の宴（四四九三、四四九四）

渤海使に贈る（四五一一四）

四十二歳（天平玉字三年）
新年の祈り（四五二六）

IV 万葉以後の家持

四十五歳（天平玉字六年）
中務大輔

四十七歳（同八年）
薩摩守

五十歳（神護景雲元年）
大宰少貳

五十三歳（宝龜元年）
民部少輔 正五位下

五十四歳（同二年）
從四位下

五十七歳（同五年）
相模守 左京大夫兼上総守

五十九歳（同七年）
伊勢守

六十歳（同八年）
從四位上

六十一歳（同九年）
正四位下

六十三歳（同十一年）
参議・右大弁

六十四歳（天応元年）

正四位上 従三位

六十六歳（延暦二年）

中納言

六十七歳（同三年）

持節征東將軍

六十八歳（同四年八月）

陸奥按察使鎮守府將軍として多賀で死去

万葉集歌の引用は、CD—ロム版万葉集（塙書房）を基本的に用いているが、こちらで本文を適宜改めた箇所もある。また、家持歌の植物表、万葉の雪歌、万葉の月歌の作者、歌番号を表にして掲載したが、文学修士神垣綾さんの助力を得た。

注

- (1) 中西氏『万葉集全訳注』の四一三四番脚注1に「雪月花の美意識の最初」とある。
伊藤氏『万葉集釈注（九）』に、「この歌は、風雅な歌材としての雪・月・花・を組み合わせられた和歌史上最初のもの」とある。六一九頁
- (2) 『セミナー万葉の歌人と作品（卷十二）』（万葉秀歌抄） 三四四頁
- (3) 『花と生活文化の原点万葉の花』「春の花 梅」 五十頁
- (4) 「春花の 貴くあらむと」（「香川大学国文研究」 十九号）
- (5) 「大伴家持と〈なでしこ〉の花」（「梅光女学院大学日本文学研究」 二十九号）

(6) 大貫茂著『万葉植物事典』(クレオ)の「資料編・植物歌総覧」を参考になっている。また、角川書店CD新編国歌大観を併せて用いた。

(7) 「袖に扱入れつ染まば染むとも」『万葉集』卷十九「詠霍公鳥井藤花一首歌」を中心に」(『文学・語学』一七九号)

第一章 雪の歌

はじめに

大伴家持は、十五歳の天平四年の処女作（八・一四四一）で雪をうたい、万葉集で最も新しく、しかも家持四十二歳の天平宝字三年元旦の歌（二十・四五一六）でも雪をうたう。天平宝字三年の元旦は、たまたま節氣でいう立春の日でもあり、大変おめでたい日であった。

ちなみにここである「雪の歌」とは、歌詞に「雪」「はだれ」「あられ」を含む歌である。「あられ」と「はだれ」は、卷十冬相聞に「雪に寄せたる」として十二首を載せているが、第一首目が「ささの葉にはだれ降り覆ひ」（三三七）とあり、第二首目が「霰降りいたく風吹き」（三三八）とある。卷十の編纂者は、「はだれ」「霰」を雪の範疇で理解していた。従って万葉集では百六十三首が雪の歌である。万葉の雪の歌は、表を九十七頁に載せる。

ところで家持の雪の歌の研究は、佐々木民夫氏に既に示唆に富む論文があり、雪の歌人という呼称も与えている。^{（注）}佐々木氏も「はだれ」を雪の歌としている。

まず作品の年代順に番号で、習作時代、越中時代、少納言時代に分けて雪の歌を示す。

習作時代（三首）

十五歳（天平四年）

八・一四四一（春雑歌）

二十九歳（天平十八年） 正月

十七・三九二六

不明 八・一六四九（冬雑歌）

八・一六六三（冬相聞）

越中時代（十六首）

二十九歳（天平十八年） 十一月

十七・三九六〇

三十歳（天平十九年） 四月

四〇〇〇 四〇〇一

九月

四〇一一

三十一歳（天平二十年）

三月

十八・四〇七九

三月

四〇二四

三十二歳（天平感宝元年） 五月

四一〇六

閏五月

四一一一

十二月

四一三四

三十三歳（天平勝宝二年） 三月

十九・四一四〇

十二月

四二二六

三十四歳（同三年） 正月

四三二九

四三三〇

四三三四

少納言時代（七首）

三十五歳（天平勝宝四年）	十一月	四二八一
三十六歳（同五年）	正月	四二八五 四二八六 四二八七 四二八八
三十九歳（同八年）	十一月	二十・四四七一
四十二歳（天平宝字三年）	正月	四五一六

家持の時代には、季節に二種類があつた。暦の月で決めた春夏秋冬と節気で使われる立冬、立秋などに基づく四季である。節気でいえば、立春に一番近い朔を元日にするのであるから、現在の太陽暦で言う一月二十日程からに二十日程の間に正月一日がある。旧年立春なども十二月に立春があることであるが、当然太陰暦では立春に近い朔が元日になるので、十二月から春が生じるわけである。しかし、家持は節気で立春になつていても、春という意識はそれほど強いものではない。天平宝字元年の十二月十九日が立春なのであろう。その前日の十八日と同月二十三日の歌を引用する。四十歳になつていた家持は、十二月十八日に大監物三形王の宴会に参加していた。さらに二十三日に大原今城宅でも宴席で歌をうたう。これらの歌から、立春と正月から春という区別もあつたことがわかる。

十二月十八日に大監物三形王の宅にして宴する歌三首

み雪降る冬は今日のみうぐひすの鳴かむ春へは明日にしあるらし（二十・四四八八）

右の一首、主人三形王

うちなびく春を近みかぬばたまの今夜の月夜霞みたるらむ（同・四四八九）

右の一首、大藏大輔甘南備伊香真人

あらたまの年行き帰り春立たばまづ我がやどにうぐひすは鳴け（同・四四九〇）

右の一首、右中弁大伴宿祢家持

二十三日に、治部少輔大原今城真人の宅にして宴する歌一首

月数めばいまだ冬なりしかすがに霞たなびく春立ちぬとか（同・四四九二）

右の一首、右中弁大伴宿祢家持作る。

以上の歌では、旧年立春を踏まえて、春は正月からという意識も吐露している。しかし、三形王が「春へは明日」といい、家持が「月数めばいまだ冬なり」とうたいながら、「春立ちぬとか」と詠うところに、立春の意味を踏まえている。天平宝字元年十二月には、三形王、甘南備伊香真人、家持は旧年立春を踏まえて歌をうたっていることになる。ここでは立春が年の改まるという考えから、「あらたまの年行きがへり」と言ったのであろう。

しかし、あくまで正月元日から三月末までが春、十月から十二月晦日までが冬という考えで、家持は基本的に四季を理解している。それは、「月数めばいまだ冬なり」と家持がいつているし、さらにホトトギスは夏になれば鳴くとうたうともいう。暦でいう四月一日からを夏と考えていつていることからそれは知られる。もちろん三月に節氣の立夏があつて、「二十四日は立夏四月の節に応る。これに因りて二十三日の暮に、忽ちに霍公鳥の暁に喧く声を思ひて作る歌」（十九・四二七 題詞）と触れることもある。但し、これは春の立春と同様に例外的なことであり、基本は四月一日をもつて夏という意識である。

即ち、万葉一般は立春が十二月中にもあるとしながら、春は正月一日から三月末日までという暦の意識を基本に持っていたことが知られる。

さて、家持の雪の歌は、二十六首である。冬の季節にうたわれた、或いは分類が冬であるものは、六首である。春が一番多くて十三首、夏が六首、秋が一首である。これから考察するのは、四季を配慮して雪の歌の特質を考えてみたい。

一 万葉の雪

島田裕子氏は、万葉の雪を五つに分類している。それは、①相聞歌の雪 ②自然詠歌の雪 ③雪中梅花 ④讃山歌の雪 ⑤賀歌の雪である。^(注2)しかし、この考察では、家持の雪を詠った季節に配慮してみたい。

歴史的に最古の雪の歌は、天武天皇の歌である。皇位継承をめぐる壬申の乱と関わる吉野出家の内容で理解されている二五番と或る本の二六番である。実際に天武天皇が吉野に着かれたのは、日本書紀では天智天皇十年の冬十月二十日のことである。

み吉野の 耳我の嶺に 時なくそ 雪は降りける 間なくそ 雨は降りける その雪の 時なきがごと その雨の 間なきがごとく 隈もおちず 思ひつつぞ来し その山道を(二五)

雪や雨にたたられつつ吉野に行く道で思い悩みして歩まれたとあるのは、日本書紀を参照して季節的に正しい。し

かし、或る本の二六番もほぼ同じ内容であるので、天武が吉野に隠棲される吉野歌語りとしても言いたい伝承歌を想定させる。「雪は降りける」「雨は降りける」とある「ける」の例が、第三者たる歌人の存在と歌語りを示しているのであるまいか。山部赤人も「時じくそ 雪は降りける」(二・三二七)とあるが、一般的な旅人の姿を彷彿させてしまう。ここでは、「つつ」「し」「ぬ」等が緊迫感の表白であろう。とにかくここにあるのは、冬の季節の雨か雪か、どちらにせよ寒さ厳しい上にさらに難渋して、且つ思い悩む姿を雪と雨に結びつけた。山上憶良の貧窮問答歌(五・八九二)は、「風雑じり 雨降る夜の 雨雑じり 雪降る夜は」とあって、貧しさに思い悩むための条件にしている。

一方、天武と藤原夫人五百重娘は、雪をめぐる機知も見せる。

我が里に大雪降り大原の古りにし里に降らまくは後(二・一〇三)

我が岡のおかみに言ひて降らしめし雪の碎けしここに散りけむ(二・一〇四)

この天武「我が里に」と藤原夫人「我が岡の」という二首は、対決的な言いあいである。恐らく即興的なものであり、天武天皇が大雪に興じた歌を、大原の里にいた妻に贈ったのであろう。直裁的な贈答でありながら、からかい、挑発の贈に対して、答でも「我が里」を「我が岡」へ、「大雪」を「雪の碎けし」へ、「降らまく」を「散りけむ」と陰影のない露骨と言うべきやり返しをうたう。この歌がうたわれたのは、天武天皇時代の大雪の日が契機にあるのであろう。「おかみ」と大雪が結びついたところに、雪がお目出度いものということばかりか、農業で言う冬の慈雨となることを知っていたと言うことであらう。伊藤博氏は、天武朝の大雪が天武六年と十五年に記録があると述べて、そのいずれかを創作時期に想定しているし、鈴木日出男氏は、むしろ天皇と夫人の公的な関係を越えて、「私的な男女の

親密」を暗示している、とする。^(注3)

雪の歌で有名なのは、山部赤人である。富士山の特徴を雪で表した。

田子の浦ゆうち出でて見ればま白にそ富士の高嶺に雪は降りける（三・三一八）

山部赤人を歌聖と言ったのは、古今集の序である。しかし、具体的にこの歌が流布したのは、百人一首であった。そこでは、初句が「田子の浦に」、第三句が「しろたへの」、第五句が「雪はふりつつ」である。そこに共通しているのは、長歌にもある「語り継ぎ 言ひ継ぎ行かむ 不尽の高嶺は」（三・一七）が、白い山であったことである。このことは、高橋虫麻呂の不尽の歌でも、「燃ゆる火を 雪もち消ち 降る雪を 火もち消ちつつ」（三・一九）とあり、その反歌では雪が「六月の十五日に消ゆればその夜降りけり」（三・二〇）とあり、万年雪の富士山に拘る。

また、大伴旅人は、梅花と雪を結びつけた。雪と花びらを結びつける連想とは、比喻であり、見立てでもある。

我が園に梅の花散るひさかたの天より雪の流れ来るかも（五・八二二）

さらに、雪と月を結びつけたのは、赤人である。霊峰富士を雪で表した赤人は、

……天の原 振り放け見れば 渡る日の 影も隠らひ 照る月の 光も見えず 時じくそ 雪は降りける……
（三・三一七）

とうたう。

引用した三一七番の富士の高嶺の本質は、雪で表されているが、その一方で頂に太陽の光も隠れ、照る月の光も遮られるという。月が高い峰を形容するために用いられた例である。一般的に月の歌は、相聞歌に多い。月夜に夫が訪ねてくるのであろう。しかし、月と雪の組み合わせは、万葉集で四首に過ぎない。しかも三首は長歌（三一七、八九二、三三三四）であり、短歌では家持の一首（四一三四）だけである。

さて、万葉集には季節を踏まえた歌がある。春夏秋冬は、巻八と巻十で分類が試みられた。春は正月から三月まで、冬は十月から十二月までである。節気では、年内立春も三月立夏も当然あったが、それが例外的に触れられる程度である。雪は概して春に詠まれる。金熙淑氏は、春の雪と冬の雪が歌として特徴があることを指摘した。春の雪は景物として対比的な梅とよく組み合わせられてうたわれているとし、冬の雪は春を待ち望む気持ちと相聞的に雪への愛着をうたう、とする。^{（注4）}

雪の特徴的な歌としては、正月にうたわれた歌が卷十七にある。

天平十八年正月、白雪多く零り、地に積むこと数寸なり。ここに左大臣橘卿、大納言藤原豊成朝臣また諸王諸臣たちを率て、太上天皇の御在所「中宮の西院」に参入り、仕へ奉りて雪を掃く。ここに詔を降し、大臣参議并せて諸王らは、大殿の上に侍はしめ、諸卿大夫らは、南の細殿に侍はしめたまふ。而して即ち酒を賜ひ肆宴したまふ。勅して曰く、汝ら諸王卿たち、聊かにこの雪を賦して、各その歌を奏せよ、とのりたまふ。

左大臣橘宿祢、詔に応ふる歌一首

降る雪の白髪までに大君に仕へ奉れば貴くもあるか（三九二二）

紀朝臣清人、詔に応ふる歌一首

天の下すでに覆ひて降る雪の光を見れば貴くもあるか（三九二三）

紀朝臣男梶、詔に応ふる歌一首

山の峽そことも見えず一昨日も昨日も今日も雪の降れば（三九二四）

葛井連諸会、詔に応ふる歌一首

新しき年のはじめに豊の年しらすとならし雪の降れるは（三九二五）

天平十八年は、家持二十九歳になっていた。その前後は人生の激動時期と言っても良い。それは、前年に聖武天皇が恭仁京から奈良に都をもどしていることと、家持が叙位最初として従五位下をたまわっていた。さらに天平十八年三月に宮内少輔という庶務を司る役職に任命されていて、それ以前の内舍人であった延長上にあたるような仕事であり、天皇の側近である。しかし、三ヶ月後六月には、越中国守に任命されている。時期としては七月には越中へ赴任をしていたのであろう。

家持の歌（三九二六）は、後に引用するのでここでは、記録に残るその他四人を引用した。左大臣橘諸兄は別格であるが、紀清人、紀男鹿、葛井諸会は、それぞれ五月武蔵の守、四月大宰少弐、翌天平十九年相模守として任命されている。家持も含めて地方官として任命されたのは偶然ではない。恐らく、紀氏、葛井氏、そして大伴氏は、諸兄を中核とする皇親政治を理想として、東大寺の大仏建立という国家的なプロジェクトと関わるのであろう。

家持も含めて、天皇の「汝ら諸王卿たち、聊かにこの雪を賦して、各その歌を奏せよ」の命に応える内容が歌にあ

る。諸兄と清人は、天皇の威光を尊び、男鹿は大雪であることで豊作を予祝している。諸兄に至っては、伝統的な新年の祝賀とさらに豊年と大雪の因果をうたうのである。奈良時代の貴族は、雪を祥瑞として尊び、さらに雪を嬉々として歓ぶ態度を見せている。その典型的な例が天平十八年正月の大雪であった。祝賀として雪を詠んでいることは、春だからということもあるが、正月に起因する。そこで、この論では、季節に配慮すると共に、春から正月を独立させた。

二 夏と秋の雪

雪は冬と春のものであるが、山部赤人は富士の高嶺の雪を「時じくそ 雪は降りける」（三・三一七）といい、高橋虫麻呂は「雪は六月の十五日に消ゆればその夜降りけり」（三・三三〇）という。万年雪の描き方は、それぞれ異なるにせよ、高山の雪に季節はない。同様に夏の花を代表する植物であるのに、冬の状態を画いた歌を家持は作る。

卷十八にある家持三十一歳の天平感宝元年閏五月には、夏に創作されながら、橘の冬が描かれている。

…… み雪降る 冬に至れば 霜置けども その葉も枯れず 常磐なす いやさかばえに 然れこそ 神の御代
より 宜しなへ この橘を 時じくの 香の菓実と 名付けけらしも（四一一一）

橘を主題にする歌であるが、橘が日本にもたらされたのが田道間守としている。橘は、春に若枝を伸ばし、ホトトギスの鳴く夏五月に初花を娘子に贈り、秋には実がつやつやと輝き、そして引用した「み雪降る」冬には、霜が降り

ても葉は枯れないでいる、と四季おりおりに形容されている。冬の橘を雪と結びつけて形容していた。橘の歌をうたったのは、閏五月二十三日であつた。

「庭中の花に作る歌一首」（四一一）は、三日後の同月二十六日に創作している。ここでは、「み雪降る」が越の枕詞として「大君の 遠の朝廷と 任きたまふ 官のまにま み雪降る 越に下り来」（四一二）とうたわれた。夏に雪をうたうのは、川の増水について触れた描写に使われている。題詞には創作の事情が詳しく述べている。そこでは越中の掾久米広縄が朝集使で都に行つて戻つてきたので、国守館で宴を開いたとある。

歌では、「射水川 雪消溢りて 行く水の いや増しにのみ」（四一六）と国府近くを流れる射水川の雪解けによる増水に触れて、恋しさを表白している。

奈良から越中府中までは、九日程度の日数をついやす旅であろうか。帰国の途中近江の琵琶湖を過ぎれば、そこからは山道の連続である。愛発の関を越えて、或いは敦賀からは一時的に船に乗ったかも知れないが、とにかく越前と越中の国境にも俱利伽羅峠がある。題詞に天平二十年とあり、前年から上京していて、閏五月二十七日に帰国しているのであるから、半年ぶりの再会である。その喜びを「射水川 雪消溢りて 行く水の いや増しにのみ」というのである。国府近くを流れる雪解け水で増水する射水川を具体的な例にして一層恋情が募るという。

以上の例は、越中が雪国であり、京の風土と異なることから誕生している。十歳ほどになつていた家持は、父旅人と大宰府での生活は経験していたのであろうが、越中とは余程異なつていたのであろう。春の訪れかた、樹木の種類の違い、或いはホトトギスの鳴く時期などのずれを指摘している。しかし、北アルプスを歴史上最初に紹介した榮譽は、次に引用する歌で与えられた。

立山の賦一首并せて短歌「この立山は新川郡にあり」

天ぎかる 鄙に名かかす 越の中 国内ことごと 山はしも しじにあれども 川はしも さはに行けども 皇
神の うしはきいます 新川の その立山に 常夏に 雪降り敷きて 帯ばせる 片貝川の 清き瀬に 朝夕ご
とに 立つ霧の 思ひ過ぎめや あり通ひ いや年のはに よそのみも 振り放け見つつ 万代の 語らひぐさ
と いまだ見ぬ 人にも告げむ 音のみも 名のみも聞きて ともしぶるがね (四〇〇〇)

立山に降り置ける雪を常夏に見れども飽かず神からならし (四〇〇一)

片貝の川の瀬清く行く水の絶ゆることなくあり通ひ見む (四〇〇二)

四月廿七日大伴宿祢家持作れり。

立山連峰のどの山をここで立山といったのがよく話題になる。剣岳という登山家もいる。国府のある高岡市伏木あたりからでは、大日岳などのために、その正面奥に位置する大汝山と雄山を中心とした山は見えにくいらしいことも、立山を特定することに配慮されている。また、短歌にある片貝川の源流は毛勝三山と呼ばれる山塊の猫又山を源としていて、一般的に言う立山の中心から北にずれる。北から毛勝三山、剣岳、そして大汝山、雄山と連続しているが、どの山塊をいうのであろう。

さて、立山賦では、まず国土賛美として「山はしも しじにあれども 川はしも さはに行けども」という。土地誉めの形式である沢山ある山と川から立山と片貝川を選ぶ形式である。片貝川は立山連邦の中心である雄山などから流れる常願寺川、神通川などから見れば、北に偏りすぎている。しかし、好意的にみれば、立山を最大限に拡大して描いたためであらう、と考える。

山の形容は「皇神の うしはきいます 新川の その立山に 常夏に 雪降り敷きて」とある。夏の盛りでも雪降り積もっていてというのが、立山の山としての中核である。

この山の描写は、山部赤人が富士を形容して高山である特質として雪を用いて三一八番で「ましろにぞ」といつているし、高橋虫麻呂は万年雪にこだわりの、六月十五日に消えても夜にはまた雪が降ると三二〇番でいつている。

山の歌には、川が帯になっている。これを山と川とが対照的でありながら、源流としての山の存在もその背景にあるのであろう。立山賦とあるのであるから、ここでは山が主体である。たまたま片貝川が登場しているが、立山連峰として捉えれば、登場した川が北に偏っていることで、むしろ結果的には立山の視野に広がりを見せている。立山が今風に言えば、「表立山連峰」ということである。高山の雪は、山部赤人、高橋虫麻呂を経て、大伴家持によつて伝統が庶幾されたのである。

家持の雪は、夏に用いられた歌の内容として、越の枕詞、或いは聖なる山として高山を形容する雪、或いは雪解けの増水という風土、そして橋を讃えるために春夏秋冬の特徴を形容するために冬を代表させて雪を橋とを比較して描く例である。家持独自としては、越の枕詞として用いる例（四一一三）と冬の橋の形容に用いた例（四一一一）がある。越の枕詞としては次の歌も同じ例になる。秋九月に雪を詠む歌である。

題詞に「放逸せし鷹を思ひ、夢に見て感悦して作る歌」とあり、雪の描写は「大君の 遠の朝廷そ み雪降る 越と名に負へる 天さかる 鄙にしあれば」（十七・四〇一一）と第三句目でうたわれている。素材的に極めて個性的であるが、雪は越中の象徴として使用されている。

天平十九年九月二十六日の詠歌であるから、家持三十歳である。五月に税帳使として京に上ったのであろうから、国府館に帰宅して程なくの創作かも知れない。この年は、家持三賦と呼ばれる長歌を創作していて、京への土産とし

て披露されたのであろう。越中を「大君の 遠の朝廷そ み雪降る 越と名に負へる」というのであるから、大宰府に匹敵する意識で遠い朝廷として越中国司を描いている。家持は、それなりに大望を抱きつつ国守として政を司っていたのである。大宰府と異なるのは、雪が枕詞になる風土である。

三 冬の雪

大伴家持の題詞には「雪、月、梅の花を詠める」（十八・四一三四）とある天平勝宝元年十二月の歌があった。家持は、三十二歳になっていた。序章でも取り上げたので引用を省くが、今肇子氏が四一三四番について、宴席の歌か、独詠歌か、という疑義を提出して、「愛しき児もがも」から宴席歌であろうとして、さらに月と雪の組み合わせも集中例がない、とする。^(注5)長歌に例がないわけではないが、短歌は唯一となる雪と月の例である。

さて、冬に詠まれた歌では、年代がはっきりしないが、巻八の冬雑歌と冬相聞に次の歌がある。

今日降りし雪に競ひて我がやどの冬木の梅は花咲きにけり（八・一六四九）

沫雪の庭に降り敷き寒き夜を手枕まかずひとりかも寝む（八・一六六三）

梅の花でありながら、冬木の梅とあり、冬の枯木に雪が積もり、それを冬木の梅と言ったのであろう。冬木は、もう一例あり、巨勢宿奈麻呂の一六四五番である。枯れ木に降る雪を梅の花とちらっとだけ見た、とうたう。家持は、雪と競い合つて梅の枯れ木に花をさかせた、とうたう。万葉の梅は、紅梅をうたうことがない。全てが雪とよく結び

つく白梅を意味していた。

一六六三番は、相聞の部に入っているだけに、妹の存在を思わせる。「沫雪の消ぬべきもの」（一六六二）とある歌があり、沫雪であつても、それが庭に降り続くことで寒々とした夜であるというのである。ここに妹の暖かさを連想させる独り寝のわびしさをうたう。雲が降りしきる日に、かえつて降雪よりも寒々と感じる時があるが、そのあたりの機微を感じさせている。

雪と言えば冬の季節であろう。卷十には、冬の雑歌と相聞に、それぞれ雪を詠めると雪に寄せてと題して歌が記録されている。ところが卷十の春雑歌にも雪を詠めるとして歌が記載されている。さすがに春の相聞には雪の項目がない。家持の雪の歌は、季節が分かる。天平十八年冬十一月にうたわれた三九六〇番の題詞に「相飲ぶる歌二首、越中守大伴宿祢家持」とあるが、その一首に雪がうたわれている。

庭に降る雪は千重敷く然のみに思ひて君を我が待たなくに（十七・三九六〇）

家持は天平十八年越中赴任後の九月に弟書持の訃報を受け取る。着任の宴で大伴池主が示した歌は、こころ込められた内容がある。その池主が大帳使で上京していたが、十一月に帰国したのである。その喜びを短歌二首で表白した。庭に降った雪は、家持が見続けてきた雪であるが、それよりも「君」を思う気持ちが勝っている、という。相手を「君」という女性仮託歌であるが、左注（三九六一）に、宴をした日に「白雪忽ちに降りて、土に積むこと尺余なり」とある。その意味では当意即妙の歌である。

雪の歌で似た歌がある。「雪の消残る」「いざ行かな」（四二二六）と「消残りの雪」「摘み来な」（四四七一）という

違いにも注目したい。

この雪の消残る時にいざ行かな山橘の実の照るも見む（十九・四二二六）
消残りの雪にあへ照るあしひきの山橘をつとに摘み来な（二十・四四七二）

さて、四二二六番は、天平勝宝二年十二月の作であり、四四七一番は、天平勝宝八年十一月の作である。その間六年の開きがある。越中の守も、その時は兵部少輔になっている。天平勝宝三年に少納言として京に戻り、家持には何があつたのであろう。この二首を比較すれば、山橘が橘諸兄を比喻していることに変わりがないが、しかし雪消にある山橘を積極的に「いざ行かな」といつてみたいと願うのと、土産に実を摘んできたいと願うのでは、期待感が違う。もう諸兄に期待できない現実が天平勝宝八年十一月の家持なのであろう。四四七一番は題詞にも「小雷起こり鳴り、雪は庭に落り覆ふ。忽ちに感憐を懷き」とあり、悲しい気分させる冬の小雷をとまなう雪である。

この二首の違いは、あこがれた都での生活が現実到家持に与えたものがどういうものであつたかを暗示している。橘氏への期待が薄れたということでもある。

四 春の雪

家持の雪で春に詠まれた歌は、二十六首中で一番多く十三首ということになる。習作時代が春二首、冬二首である。越中では、夏六首、春五首、冬が四首、秋一首である。少納言時代には、春が五首であり、冬が二首になる。家持は、

越中だけであるが、夏に詠んだ歌で雪を登場させていることも特徴となる。春の雪の歌は、どのような特徴があるのであろうか。春は、正月から三月までである。

参考にしたことは、卷十に雪を詠める、或いは雪に寄せてと題して、春の雑歌（十一首）と冬の雑歌（九首）、そして冬の相聞（十二首）にそれぞれ、歌群として掲載していることである。雪は必ずしも冬に限らないのであり、むしろ春にもうたわれた。しかし、春の雪には、比較的梅という植物との結びつきが強い。梅の花は、万葉で百十九首にうたわれているが、その中で雪と組み合わせられてうたわれた歌は、二十九首もある。雪と梅の組み合わせは家持が三首であるのに、旅人が四首を数える。梅花の宴の一首を取り上げる。

我が園に梅の花散るひさかたの天より雪の流れ来るかも（五・八二二）

引用した歌は、落梅を天から降る雪と見立てた歌である。雪を比喻として用いていて、しんしんと降る雪の静けさが梅の花びらの散る様と重なる歌である。歴史的に確かな創作年の知られる例としては、旅人主催の梅花の宴が天平二年正月十三日である。大宰府長官宅で開かれていて、その時には以来旅人以外にも歌があるので、積極的に梅花の宴で梅と雪を比較してうたわれることが始められたらしい。

春の雪の家持歌の初出例は、天平四年の歌である。養老二年に誕生した家持と考えているので、家持十五歳の処女作になるし、鶯の歌と題詞にある。

うち霧らし雪は降りつつしかすがに我家の園にうぐひす鳴くも（八・一四四二）

雪と鶯を歌にない梅を仲立ちにさせて連想させた歌である。雪から梅、そして梅から鶯と連想されているのであるが、梅を省略させて、「しかすがに」という逆説的な副詞によって鶯が登場している点に家持の創意がある。そもそも「しかすがに」は、笠金村の長歌一首（五四三）を含めて万葉に十一例を数える。家持の頭には、引用した旅人の歌も作られた大宰府での梅花の宴で披露された大伴百代の次の歌も意識されていたのであろう。

梅の花散らくはいづくしかすがにこの城の山に雪は降りつつ（八二三）

この百代と比較しても、家持は視覚にのみとらわれずに、見えないものを聴覚で補えて感動している一首である。処女作には、その後の作家活動で明らかになっていくさまざまなことが内在しているという。ここでは、聴覚がとりわけ鋭敏であることを指摘しておきたいことと、処女作と梅花の宴で披露された旅人の歌、百代の歌との連想があることである。

さらに配慮したいのが梅や鶯が春の季節のものであれば、雪が冬の季節のものという矛盾がうたわれていることである。もちろん雪が冬に限定されないことは、巻十の春にも雪を詠む歌がある。

家持に関することでも、冬の季節にうたわれた例よりも、春の季節である一月から三月にうたわれた例が多い。また「しかすがに」を用いた歌は、巻十の春雑歌に鳥を詠むに三首、柳を詠むに一首、花を詠むに一首ある。とりわけ花を詠む一首は、雪を冬のものとしている。

雪見ればいまだ冬なりしかすがに春霞立ち梅は散りつつ（二八六二）

家持は処女作でも「しかすがに」を用いていたが、さらにその作に類似する一首である。ちなみに一四四一番は評価も類型的、あるいは、それを越えた個性がある、という二つの意見に分かれる。个性的なものは、「我家の園にうぐひす鳴くも」の箇所であり、野山ではない、庭園を意味する「園」で鳴く鶯に橋本達雄氏は個性を認める。^{（注6）}

春であるのに、冬の雪が降るといのが、春の雪をうたわせたのである。季節のずれに敏感であるというか、あるいは季節と暦との矛盾にとられすぎるのかもしれないにせよ、万葉集では春にもかかわらず、冬の景色が展開している、とうたうのは類型である。しかし、冬の雪景色から春の鶯の鳴き声に注目する「しかすがに」の歌はない。この聴覚の鋭敏さが処女作に具体化していることは、すでにこれから創作活動で見せるであろう家持の特質となっている。視覚にも、聴覚にも優れた歌人であった。

次に引用する歌は、天平二十年の歌である。越中守に赴任して三年目の春であり、家持三十一歳である。最初の年は秋に赴任して、翌天平十九年春に大病して、春の出挙の旅は出来なかった。二十年春の出挙は、巡行の月が二月と三月とで意見が分かれる。

越中での四首（四〇二一から四〇二四）と能登での五首（四〇二五から四〇二九）には、陸路と船路という違いがある。また、越中では全ての歌に、「雄神川」「鵜坂川」「婦負川」「延槻川」という川が登場している。立山は、立山賦では霊峰として夏に雪が降る山として描かれていても、帯としての片貝川がうたわれていた。山には、川の源流としての山の存在がある。それを意識して家持は、四〇二四番をうたっている。著名な歌であるだけに、第二句の「雪し消らしも」と「雪し来らしも」の解釈の問題があるが、いまだに決着していない。雪が溶けたのか、或いは雪解け

水として川の渉る瀬にまで来たのか、ということである。鎧までぬらす川の水で雪解けの増水に気がついたというのであるから、日常の生活体験に基づく内容がある。出挙以外でも国守としてこの延槻川でなくとも、あまた越中の川を渡ることがあったのであろう。題詞に「新川郡」とあるが、現在の黒部市、滑川市、魚津市、富山市を指す。

立山の雪し消らしも延槻の川の渡り瀬あぶみ漬かすも（十七・四〇二四）

「立山の」歌は、目に見えるものの変化がないにも拘わらず、しかし川の渡瀬の鎧をぬらす水量で雪解けをしったのであるから、微妙な春を感じているのであろう。佐藤隆氏がこれまでの近代注釈書を紹介して、伊藤全釈の「雪し来らしも」の解を紹介し、増水した激流の様子とその冷たい水に直接触れた驚きを、この詩の鑑賞として述べている。^{（注7）}

次の歌は、「しかすがに」を用いた歌である。家持は、越中に赴任して四年目であり、三十二歳になっている。天平十八年の赴任には、越中の掾大伴池主であったが、天平二十年に越前の掾として赴任したらしい。家持は、その池主から贈られた歌に応えた歌四首を作る。引用するのは、更に目についたものを詠んだとしている。三月十六日（左注）の春でありながら霞がたなびいているのに、現実はず日も今日も冬の雪がふっている、という類型的な内容である。

三島野に霞たなびきしかすがに昨日も今日も雪は降りつつ（十八・四〇七九）

以上の作品は、春ということを取り上げた。卷八の一首は、春と言うことで月までは知られない。また、四〇二四番は、春の出挙であること、また春の雪解けがうたわれているのであるから、越中では二月か三月の作である。その

一方で春は正月の歌が一番多い。正月の歌は、晴れ場でうたわれている。

五 正月の雪

元日から暦では春になる。額田王が「冬こもり 春去り来れば 鳴かざりし 鳥も来鳴き 咲かざりし 花も咲けれど ……」(一・十六)とうたった春である。

正月も春であるが、家持の雪の歌は正月の場合晴れ場でうたわれた歌がことさらに目立つ。それは賀歌の雪ということになる。春の歌十三首中で、正月と知られる歌は九首である。そこで雪の歌を正月は独立させた。

天平十八年の正月に「白雪多に降りて、地に積むこと数寸なりき」と言うことがあり、橘諸兄が廷臣を連れて参上して、除雪をすることになり、さらに歌が聖武天皇から要望されている。その「詔に応ふる」家持の歌がある。

大宮の内にも外にも光るまで降らす白雪見れど飽かぬかも (十七・三九二六)

雪は豊作を予祝するめでたいものであった。柿本人麻呂は、「見れど飽かぬかも」(一・三六)と吉野讃歌で伝統的な表現を用い、さらに儀礼的な褒め言葉としては、笠金村、高橋虫麻呂、田邊福麻呂等に受け継がれる伝統になった。家持も讃仰を「白雪」に見ていたことになる。

ちなみに訓は「ゆき」といいながら、原文に「白雪」とある若い新田部皇子を讃える人麻呂の長歌がある。

やすみしし 我が大君 高光る 日の皇子 しきいます 大殿の上に ひさかたの 天伝ひ来る 白雪じもの
行き通ひつつ いや常世まで (三・二六二)

そもそも「白雪(ゆき)じもの」も万葉集でこの例だけであるが、天から雪が降るといっているのであるから、神話的な高天の原にいる神が雪を降らせるのであろう。それをお目出度いものとするので「白雪(ゆき)」というのであろうが、家持は「白雪(しらゆき)」で天から降る雪をもつて人麻呂の伝統を庶幾して「見れど飽かぬかも」と讃仰を表したのである。

万葉集には「しらゆき」の例は、七首である。家持にはもう一首で用いている。家持が三十五歳である天平勝宝四年十一月二十七日にうたわれた歌である。

白雪の降り敷く山を越え行かむ君をそもとな息の緒に思ふ (十九・四二八二)

左大臣、尾を換へて云ふ、「息の緒にする」と。然れども猶し喩して曰く、前の如く誦め、と。

橘奈良麻呂が但馬按察使になったための餞別の宴で披露された歌である。左大臣諸兄も居たらしい。橘奈良麻呂を慕うとうたい、言祝ぐ一首である。この「白雪」も、人麻呂や家持の三九二六番と同様に将来を祝福する意味を込めて用いたれた。偶々人麻呂は「白雪(ゆき)」を用いたが、家持は「白雪(しらゆき)」を用いて、祝福、予祝、讃仰といった褒め言葉としてるのである。この「しらゆき」は、家持独自の例である。さらに左注には、左大臣が添削したとあって注目される。

ちなみに卷十九には、宴席で披露された雪の歌が多い。天平勝宝三年正月の歌が三首ある。越中で迎える五度目の正月であつた。家持三十四歳であるが、越中で迎える最後の正月という意識があつたのであろうか。国守の任期から言えば、今年はそろそろ帰任ということではあつたであらう。

新しき年の初めはいや年に雪踏み平し常かくにもが（十九・四二二九）

正月二日に守の館での宴で披露された四二二九番と三日介内蔵縄麻呂館でうたつた二首（四二三〇番四二三五番）とは明らかに違いがある。

降る雪を腰になづみて参り来し駿もあるか年の初めに（十九・四二三〇）

鳴く鶏はいやしき鳴けど降る雪の千重に積みこそ我が立ちかてね（十九・四二三五）

家持が二日にうたつた歌は、明らかに新春を言祝ぐために、お目出度い雪をうたつたものであり、その雪は国土の賛美と豊饒の証である。その雪を踏みしめて確かなものとする国守の年頭挨拶をうたう歌である。それに較べて、介縄麻呂館では、まず招待に対する挨拶とうち解けた宴を盛り上げる歌である。偶々大雪が降っていてそれを題材にしているのである。客が館の主にあてまつして、帰宅したくないと宴を盛り上げているのである。家持の下僚にたいする思いやりを感じる正月三日の宴である。

天平勝宝五年正月の雪の歌は、四首ある。家持は三十六歳になっている。

十一日に、大雪降りて積むこと尺に二寸あり。因りて拙懷を述ぶる歌三首

太宮の内にも外にもめづらしく降れる大雪な踏みそね惜し（十九・四二八五）

み園生の竹の林にうぐひすはしき鳴きにしを雪は降りつつ（同・四二八六）

うぐひすの鳴きし垣内ににほへりし梅この雪にうつろふらむか（同・四二八七）

十二日に、内裏に侍ひて、千鳥の喧くを聞きて作る歌一首

川渚にも雪は降れし宮の内に千鳥鳴くらし居む所なみ（十九・四二八八）

越中に居たときは、都が恋しい。京にいれば、越中が恋しくなることもたまあったのであろう。それほど家持は、京師での現実に満足してられない状況であつたのかも知れない。四二八五番などは、天平十八年正月の雪の歌と上の句がそっくりであり、下の句は、三形沙弥の「…降りし雪そ　ゆめ寄るな　人や　な踏みそね雪は」（十九・四二二七）を踏まえている。

四二八六番と四二八七番は、なにやら天平二年の梅花の宴で披露された歌を踏まえている。竹に鶯（五・八二四 阿氏奥島）、雪に梅ともに大宰府を思い出させる。ということとは、家持の気持ちには、京よりもあまざる鄙にあつたのであろうか。十二日の四二八八番は、「居む所なみ」とあるが、家持の心境として本来の居るべき京に、或いは皇居に身を置くべき場所がないとも理解できそうである。

家持は四十一歳になって、人生で二度目の国守として因幡に赴任した。彼の官人としての人生がそもそも地方官であつたとも言える。伊勢、薩摩、大宰府等に赴任し、そして陸奥の国で死去している。さて、天平宝字二年七月五日

に大原今城宅で送別の宴があり、家持は別れの歌（二十・四五二六）をうたい、万葉最後の歌が次の歌であり、万葉四千五百首ほどある中で元日に詠まれた唯一の歌であり、節気の立春の日でもあった。

三年春正月一日に、因幡国庁にして饗を国郡の司等に賜ふ宴の歌一首

新しき年の初めの初春の今日降る雪のいや頻け吉事（二十・四五一六）

右の一首、守大伴宿祢家持作る。

新年を言祝ぐにふさわしい歌である。お目出度い雪を素材に、「国郡の司等に賜ふ宴の歌」であるだけに縁起のいい言葉で満ちている。扇畑忠雄氏は、「第四句までの雪は結句の『いや重け』の単なる序的レトリックにとどまらず、積雪に吉兆を見る民俗的呪的の意味」を認めている。^{（註七）}

結び

大伴家持は、二十六首の雪の歌を詠んだ。その特質は、春の雪をうたうことが多い。そして、宴席で雪をお目出度いものとして、挨拶歌としている。国守であれば、国土賛美と天皇讃仰を、招待客であれば招かれた挨拶として、雪の歌を詠む。その一方、儀礼的な内容でありながら、越中の風土を雪で表した「立山の」（四〇二四）のような歌もある。

越中を雪国として枕詞に「み雪降る」（四〇一一、四一一三）は、家持の創始である。或いは、「白雪」（四二八一）

の例は、白い雪と色を指摘して、橘奈良麻呂を褒めたたえる讃歌としているのも創意である。

越中時代の家持は、雪を積極的に歌の世界で表現していた。枕詞として、風土の表現として、或いは立山という常雪の靈山として、雪がその一端を担っていた。習作時代は処女作で指摘できる伝統も基づくのであるが、そこには視覚から聴覚へという鋭敏な感性も認めたい。少納言時代は、宴席で挨拶に、或いは豊作を予祝する祥瑞として、利用している。

ここで家持の雪で最大の功績は、天体の月と雪を組み合わせたことであるが、雪の歌の代表としては次の三首を取り上げたい。

立山の雪し消らしも延槻の川の渡り瀬あぶみ漬かすも（十七・四〇二四）

雪の上に照れる月夜に梅の花折りて送らむ愛しき児もがも（十八・四一三四）

新しき年の初めの初春の今日降る雪のいや頻け吉事（二十・四五一六）

即ち、越中の風土を踏まえて叙景歌を創作し、雪見と月見との起源的な内容の歌を創作していることである。立山を紹介したこと、雪月梅花を詠んだことが、雪の歌の秀歌である。さらに月と雪の組み合わせも短歌においては家持独自のものである。雪の歌の風雅とは、家持にその起源を求めることが出来る。そして雪とは、豊作の祥瑞であり、祝すべきことであった。

注

- (1) 「家持の『雪』」(「岩手県立盛岡短大研究報告」四十六号)
 - (2) 「雪の日の肆宴歌」(『セミナー万葉の歌人と作品(第八卷)』所収)
 - (3) 伊藤氏『万葉集釈注(二)』二六四頁
 - (4) 鈴木氏「女歌の形成―坂上郎女を中心に―」(『女人の万葉集』高岡市歴史館編所収)
 - (5) 『万葉集』の季節観と心情表現―『雪』を中心に―(「国学院大学日本文学論究」六十三号)
 - (6) 卷十八・四一三四番『セミナー万葉の歌人と作品万葉秀歌抄(卷十二)』三四四頁
 - (7) 『大伴家持(1)』一三三頁
 - (8) 卷十七・四〇二四番『セミナー万葉の歌人と作品万葉秀歌抄(十二卷)』三三七頁
- 「家持の樹木信仰『つまま』『ほよ』をめぐる」(「万葉研究」七号)

第二章 月の歌

はじめに

万葉集には、天体の「月」をうたう歌が百九十六首ある。ちなみに大伴家持は、二十三首で天体の月を歌の言葉として詠む。そもそも暦で言う月と天体の月とは明確に区別出来ない場合もある。或る意味では月とは「暦」と「空」をわたる月」という両面がある。しかし、ここでは天体の月をうたう大伴家持の歌を考察する。万葉の天体の月は、表として参考のために九十八頁に載せる。

暦で言う正月、五月等の月と大空を渡る月とを一応弁別したが、例えば、卷二十にある、

秋草に置く白露の飽かずのみ相見るものを月をし待たむ（四三二二）

などは、「月をし待たむ」の解釈が分かれていて、時期とも、天体の月の出ともあり得る解釈である。家持の歌では、引用した歌の解釈はもちろんないがしろに出来ないが、万葉集を代表する歌でも月の解釈では微妙なものがある。

熟田津に舟乗りせむと月待てば潮もかなひぬ今は漕ぎ出でな（一・八）

この中学国語教科書にも採用されている額田王の歌でいう「月」とは、天体の満月、暦で言う弥生三月ともいう。潮も満潮説、潮流説があり、同様に分かれた解釈が行われている。或いは、額田王の歌が二句切れ、四句切れ、ということも大切なことであるが、この論では、問題のありそうな場合は、むしろ天体の用例としてここで言う月の歌に含めた場合もある。

大伴家持は、月をどういう思いで歌にうたったのであろうか。月とは、そのさやかに輝く光の美しさを伝統として愛でられている。家持が雪月花をうたうことは、風雅である。月歌の特質を探ることは、家持の雅な風流を理解することにつながる、と考える。

一 月の歌

万葉集卷十の秋雑歌に七首が「月を詠める」として、また秋相聞に三首が「月に寄せたる」として記載されている。春雑歌に三首が、さらに冬雑歌にも一首が「月を詠める」として入集している。万葉集では、まだ中秋の名月が誕生していないので、月が秋という季節を代表的する風情であるとは断定できないにせよ、月夜は秋が似つかわしいというそれなりの重さをもった季節感がある。

古今集では、秋歌上に五首連続して月が主題になつている歌群を見出す。巻四・一九一番から一九五番までである。ここでは、特に中秋の名月と呼称すべき内容の月はない。「月見ればちちに物こそかなしけれ」（一九三）の大江千里でも、漢詩の句を翻訳しているが、それは陰暦八月十五日の月ではない。万葉集も古今集も、月は秋の風情であるという意識があつても、中秋の名月などはうたわれていない。現代人が月見と言えば、まず中秋の名月を意味する。そ

の意味では、文献として竹取物語が八月十五日にかぐや姫が月に帰るというテーマが中秋の名月を象徴している。また、和漢朗詠集などでも八月十五日の月がテーマになっている。

さて、万葉集卷七の雑歌には、「月を詠める」として十八首（二〇六九から二〇八六）が連続して歌群をなしている。

渡瀬昌忠氏は、最初の二首とその後の四首構成が四組であり、かかる構成の宴席歌という理解である。^(注)

また譬喩歌には、「月に寄せたる」として四首（二三七二から二三七五）がある。譬喩歌は、最後の二三七五番は、左注にもあるとおり、月の歌ではない。従って、三首に共通するのは、月が恋人を意味していることである。もちろん「月読男」（二三七二）は、男を意味している。卷七の雑歌十八首は、月と物思い（二〇六九、一〇七三、美しく照り輝く月（二〇七〇、一〇七四、一〇七六、一〇八六）、月の出か、或いは月を待つ（二〇七一、一〇七九、一〇八三、一〇八四、一〇八五）、月夜の長いことを祈る（二〇七二、一〇七五、一〇七七）、月夜は恋人が訪れる（二〇七八）、月見に興じる（二〇八一、一〇八二）などの歌がある。以上が万葉の月の一般的な傾向であろう。

まず家持の月の歌を歌番号と成立年代で示す。十五歳から越中に赴任する迄の習作時代に八首が、二十九歳から三十四歳までの越中時代に十三首が、都に戻ってから因幡の守として赴任した四十二歳迄の少納言時代に二首が月の歌である。合計二十三首が家持の月の歌である。

I 習作時代（八首）

十六歳 （天平五年）

九九四

十九歳 （天平八年）

九月

一五六九

二十一歳 （天平十年）

七月七日

三九〇〇

(天平十一年から十二年)	七三六	一五〇七	一五〇八
(天平十一年から十五年)	一五九六		
(天平十二年から十六年)	七六五		

Ⅱ 越中時代(十三首)

三十歳	(天平十九年)	四月十六日	三九八八
三十一歳	(天平二十年)	二月、三月	四〇二九
	(天平二十年)	三月二十六日	四〇五四
	(同年)	四月	四〇七二
三十二歳	(天平二十一年)	三月十六日	四〇七六
三十二歳	(天平勝宝元年)	十二月	四一三四
三十三歳	(天平勝宝二年)	三月	四一六〇
	(同年)	三月二十日	四一六六
	(同年)	四月三日	四一七七
	(同年)	四月	四一八一
	(同年)	四月九日	四一九二
	(同年)	四月十二日	四二〇六
三十四歳	(天平勝宝三年)	八月	四二五四

III 少納言時代（二首）

三十六歳（天平勝宝五年） 七月

四三二一

三十八歳（天平勝宝七年） 八月十三日

四四五三

家持の月日までの年代の知られる場合は、それも示してみたが、八月の月、或いはことさら月齡等にこだわりを見せているわけでもない。また月の歌を連作していることもない。万葉集で三日月は、三例あるが、そのうちで坂上郎女と贈答した二首を除けば、人麻呂歌集の歌が一首（十一・二四六四）である。家持だけが使用した特殊な月の例としては、「あかときつき」（十九・四一八二）があるだけである。また、「つくよ」の用例が四十三首ある中で、家持は十一例あることが目立つ。また家持の月は、天平勝宝二年に用例が目立つ。これは、ホトトギスと月の組み合わせによる。

ちなみに懷風藻では、「名月」という表現も五例あり、境部王の詩には、「帰りを忘れて名月を待つ」（五二）などがある。或いは、荊助仁の美人を詠む詩には、「月は泛かぶ眉間の魄」（三四）とあり、眉あたりの美しさを月の光で表現している。残念ながら、三日月眉も蛾眉も懷風藻に登場していない。大津首の詩に「門柳未だ眉を成さず」（八四）とある。しかし、月と眉は直接的な表現の結びつきがない。

百済和麻呂には、「秋天風月の時」とあり、秋が清風明月の時であることを明示している。この秋が清風と名月の季節であることは、万葉集の一般的な風潮と一致している。即ち、風も月も季節として秋に最も似つかわしい素材であった。

二 習作時代

家持の処女作としても取り上げられることもあるのが「振り放けて」(六・九九四)の歌である。天平六年の作と考えられるので、家持十六歳ということになる。家持の九九四番は、叔母である坂上郎女と贈答で詠まれた歌である。最初に取り上げたい月の歌として、巻六にある大伴坂上郎女の月の歌三首がある。

獵高の高円山を高みかも出で来る月の遅く照るらむ (九八二)

ぬばたまの夜霧の立ちておほほしく照れる月夜の見れば悲しさ (九八二)

山のはのささらえをとこ天の原門渡る光見らくし良しも (九八三)

坂上郎女の月の歌三首の前後には、月の歌が記されている。天平の初年頃には月が詠歌の話題であつたのであろう。郎女の前には安倍虫麻呂の月の歌(九八〇)があり、九八一番は、その歌と贈答の趣がある。その後には豊前の遊女の歌(九八四)、湯原王の歌(九八五、九八六)、藤原八束の歌(九八七)があり、いずれも天体の月を詠んでいる。坂上郎女の月の歌は、九八一番が月の出が遅いのは山があるから、九八二番が月を眺めれば悲しくなるからと類型的である。しかし、九八三番は、月が美しいということを、左注によれば「月の別名をささらえをとこと曰ふ、この辞によりてこの歌を作る」とあつて、言葉に触発された一首であることが知られる。

月の出が遅いことを恨む、月光の美しさが哀感をさそう、月を比喩的に用いる、或いは月を人格化するなどが天平六年以前の歌で盛んに試みられている。しかし、月が満ち欠けしていることに触れているのは、四四二番と一二七〇

番の二首である。ここでは月の異名に触発されたことが雅であつた。同様に三日月も坂上郎女と家持、そして人麻呂歌集卷十一に一首あるだけである。但し、人麻呂歌集の卷十一の二四六四番以外にも、二四六一、二四六二番も、一部に三日月と「出月」を訓む説もある。渡瀬昌忠氏は、その表記に「三日月」（二四六一）「いづる月」（二四六二）という別々の訓を与えている。^{（注2）}興味深い説であるが、二通りの訓を与える根拠として歌の構成ということにあることに疑問を持つので、三日月の例には加えない。

同じ坂上郎女が初月の歌一首

月立ちてただ三日月の眉根搔き日長く恋ひし君に逢へるかも（九九三）

大伴宿祢家持が初月の歌一首

振り放けて三日月見れば一目見し人の眉引き思ほゆるかも（九九四）

ここの二例が特殊であるのは、月と眉が結びついていることである。細い眉を描くのは、唐の文化による化粧である。しかし、漢詩をあつめた懷風藻は、美しい眉を蛾眉と表現したり、三日月眉などと形容することはない。眉間の美しさを月の光（魄）で形容している場合が一例と柳眉が一例あつた。

叔母坂上郎女は、「月立ちてただ三日月」というが、ここでいう月は、暦で言う月日の意味が強い。それから三日月の月から天体の三日月形をした眉に連想を發展させている。即ち、眉の形容として天体の三日月が用いられたことになる。

また「眉根搔き」とは、恋人に会える前兆なのである。これも遊仙窟に、「昨夜、眼皮瞤（かゆ）かりき。今朝、好

人を見る」とあり、万葉でも巻四に、

暇無く人の眉根をいたづらに搔かしめつつも逢はぬ妹かも（五六二）

とあることで知られる。

坂上郎女が三日月眉に触れたのに対して、家持は、天体の三日月を見れば、一度見た女性の印象的な三日月眉が思い出されるという。郎女の三日月は、天体の三日月をイメージにもつていても、日付でいう三日の月という。それを家持は天体の三日月を見てという発想である。同じ三日月を眉毛の形容としながら、両者には暦で言う三日（の月）と天体の三日月というずれがある。

三日月のさやにも見えず雲隠り見まくそ欲しきうたてこのころ（十一・二四六四）

引用した二四六四番の三日月歌は、実際の月を見てということがうたわれている訳ではない。人麻呂歌集の三日月は、妻を三日月に比喻して、はつきり三日月妻を見たいのに、雲に隠れて明瞭に見えないと嘆く。坂上郎女も三日月眉をうたう。家持が三日月をうたい、さらに月から眉、さらに美しい女性と連想を働かせている。「…見れば…見ゆ」という万葉の歌として平凡な構成でありながら、家持が「一目見し人の眉引き思ほゆるかも」とうたう下の句にも、十六歳という若者でありながら、「妹」といわずに「人」という所に個性を感じさせている。この「人」とは、誰かということでは不明であろう。後に妻となる大嬢も考えられるが、それであれば「妹」とあるべきである、と思われる。

ちなみに柳眉は、懷風藻にも例があつたが、万葉集でも柳の葉に譬えられる。

梅の花取り持ちて見れば我がやどの柳の眉し思ほゆるかも（十・一八五三）

桃の花 紅色に にほひたる 面輪の内に 青柳の 細き眉根を……（十九・四一九二）

一八五三番は、梅を見て美しい柳の葉を連想している歌である。柳眉が美しい女性を想像させるのであるが、ここでは梅の花を見て感動して女性の柳眉に結びつく柳の葉を連想するのであるから、実際に見ているのは梅の花である。その美しさを女性美として柳眉を思い出した。一方四一九二番は、家持の歌である。天平勝宝二年四月の歌であるから、家持三十三歳である。ここでは明らかに直接的な美人の形容としての青柳という細い眉である。桃は、女性を象徴する花である。桃が女性を比喻しているのは、詩経以来の伝統である。

万葉集で蛾眉が登場しないが、細い眉を好んでいるので、蛾の触覚を連想させる太い眉は、流行しなかったのではないだろうか。或いは、蛾眉も細い眉の形容であつても、蛾を嫌つたのかも知れない。眉或いは眉の様子を「まよびき」といい、さらに「まよびきの」は、山の稜線の長くのびているところから枕詞にも使用される。

蛾眉と三日月眉、或いは蛾眉と柳眉も単純に重ならない、と考える。三日月眉は、柳眉と眉が細いということからほぼ重なる化粧なのであろう。即ち、蛾眉と三日月眉、或いは蛾眉と柳眉とは、眉の形が違ふと考えるべきである。唐時代の残された美人画の検討が待たれる。

また、家持の柳の眉には、父旅人に触発されたのではないか、と思われる。それは、「松浦河に遊ぶの序」（五・八五三序）に「花のごとき容双無く、光れる儀匹無し。柳の葉を眉の中に開き、桃の花を頬の上に発く」とあるからで

ある。十六歳から三十三歳になつていても、家持は女性の容貌を形容することに心していたと言ふことであろう。越中での京恋しさの一面が眉の形容に表れたということである。

月夜に門で来訪を待つ、或いは門で別かれた夫を案ずるといふ歌は多い。しかし、門田をわざわざ見たいと来るのはどうしてであらうか、と疑いたい歌（八・一五九六）がある。月夜に誘われてたまたま散歩でもするのであらうか。この歌は、天平十一年から十五年頃の作品である。妹とは、家持がうたつた「娘子に贈れる歌三首」（四・七八三から七八五）を指すのであらうか。紀女郎、坂上大嬢、安倍女郎等を意味しないのであれば、架空の存在になる。そもそも家持は、女郎と娘子とに相聞歌を贈っている。題詞には「大伴宿禰家持の娘子の門に到りて作れる歌」とある。

妹が家の門田を見むとうち出て来し心もしるく照る月夜かも（一五九六）

万葉集には、門田の例が巻十四の東歌にもあり、そこでは「橘を守部の里の門田早稲刈る」（二二五二）とあり、実際に門田では稲を植えている。妹の家を見る、或いは門を見たい、と願うのはそれなりに理解できるが、家持がわざわざ門田を見たいということが不思議である。月夜が「心もしるく」とあるから、妹に会えるとか、逢えないとか、という主題の歌ではない。

門に入る、門から出る、或いは門で見送る、門を見続けたい等と言ふことは、恋人として認められていて使われる言葉である。ところが、家持は、門ではない、門田というのであるから、妹と逢えるということをやわざわざ避けていると思われる。もし一五九六番の門田の娘がこの歌をしつたら、家持をどう考えるであらうか。私に会いたいのではない、月がきれいなのでふらふらするついでに門田を見に來ただけであり、門から入って会いたいわけでもない、と

解するのではないだろうか。そんな歌を贈るとは思えないので、やはり架空の妹なのであろう。家持のこの風狂を呼べる心理は、山部赤人に通じる。

春の野にすみれ摘みにと来しわれそ野をなつかしみ一夜寝にける（八・一四二四）

引用した歌が風狂であることは、山菜としてのすみれを摘みに来て野宿してしまう赤人の精神に表れている。そのことは、既に指摘したことがある。^{（注3）} また、人麻呂歌集には、次の歌がある。

初谷の斉槻が下にわが隠せる妻茜さし照れる月夜に人みてむかも（十一・二三五三）

この人麻呂歌集の月は、特殊である。茜色とは太陽と結ぶつくのが一般的であるのに、ここでは照れる月夜に用いられている。人が見るといいうのであるから、男にとつて不吉なことであろう。女が密会していることを想像しているらしい。この茜さした月がそもそも異例なのである。清明輝く月が一般的であるのに、二三五三番は不吉な月である。しかし、このような月を直接家持は詠むことはなかったが、月夜が狂わせ、風狂と呼ぶ内容のうたもうたっていた。一方妹の存在が事実である場合には、次のような歌に、家持は月と門をうたう。

月夜には門に出で立ち夕占問ひ足占をそせし行かまくを欲り（四・七三六）

一重山隔れるものを月夜良み門に出で立ち妹か待つらむ（四・七六五）

引用した七三六番は、天平十一年頃の作であろうし、七六五番は、天平十二年から十六年の作である。そして、妻坂上大嬢に贈った歌である。門とは、妹が待つ場所であり、家持は妹の許へいくかどうか、夕占いと足占いをしている。

家持は、美しい月夜とは妹と会う絶好の機会であることを知っていながら、月が美しくて門近くの田を見に来たのです、と歌（二五九六）で言うのである。それは、月が風狂の散歩を促したのである。このような何か衝動的にさせる狂というべき月を家持は習作時代にうたっていたのである。

家持の習作時代の月には、他の歌人に見られない天体にある三日月から眉を想像する、或いは月の美しくも怪しい光に誘われ、門田を見るといった風狂の歌があった。もちろん相聞で月夜とは、妹との逢瀬の日であった。

同じく天平十一年か、その翌年であろう、橘を坂上大嬢に贈っている。長歌と反歌（八・一五〇七から一五〇九）にも月夜が出てくる。習作時代は、「月夜」の例が多いのは、恋の時間である夜と関わる相聞でうたうからである。

十五夜隆ち清き月夜に我妹子に見せむと思ひしやどの橘（二五〇八）

橘を大嬢に贈ったのであるが、その状況として満月が過ぎた十六夜の清い月夜に見せたいのである。或いは、「十五夜隆ち」とは、満月の夜が更けてということであろうか。

この歌について、中西進氏が、月夜に輝く美しい橘の花をうたった最初の歌人として家持を評価する。^(注4)
橘は万葉集で六十九首にうたわれ、家持が二十五首もうたう。夏の植物として「五月」と結びつくが、天体の月と

組み合わせられてうたうのは、巻十七にある粟田女王の、

月待ちて家には行かむわが挿せるあから橘影に見えつつ（四〇六〇）

があるだけで、創作も天平十六年と思われる。

他に粟田女王の特徴は、「あから橘」と橘の実を「赤い実」としていることである。月と橘は家持にもあるが、家持は花であり、その意味でも単純に一致していない。家持が白い花を月にはえるとしていることは、梅の花の連想に基づくであろう。実際に梅と月とは、組み合わせが五首（二四五二、一六六一、二三二五、二三四九、四一三四）ある。また、梅と月が一首でうたわれている。その他、卯の花と月は、一九五三番、はぎと月は、二二二五番、二二三八番、桜と月は、一八八七番がある。

月と植物の組み合わせからも、家持の果たした功績は大である。もう一首忘れてならないのは、家持二十一歳の天平十年七月七日にうたわれた七夕の月である。

織女し舟乗りすらしまそ鏡清き月夜に雲立ち渡る（十七・三九〇〇）

この七夕歌は、織女が船に乗っていることで特殊である。一般的には牽牛が織女の許に船で天の川を渡るからである。月に「まそ鏡」とあるが、まそ鏡とは、宗教的な儀礼に用いたりしている。ここでは光の形容である清きを導く枕詞であるが、七日の月を形容している。万葉では、他に七・一〇七九番、八・一五〇七番（家持）、十一・二四六二

番（人麻呂歌集）に用いられているだけである。

家持の一五〇七番は、満月の清らかな月を形容するために用いられているが、七夕歌は大嬢に贈った歌よりも若干古いのであろうが、清らかな月夜と雲が立ち渡るといふ矛盾をつく技巧的な内容がある。即ち、清らかな夜でありながら、牽牛が迎え船を出し、その船が織女を乗せて波しぶきをたてて雲を発生させた、という憶良七夕歌（二五二七）を起源とする発想を取り入れた一首である。もちろん家持の個性は、雲が発生したという表現にある。

……まそ鏡　清き月夜に　ただ一目　見するまでには　散りこすな　ゆめと言ひつつ　ここたくも　我が守る
ものを　うれたきや　醜ほととぎす　暁の　うら悲しきに　追へど追へど　なほし来鳴きて　いたづらに　地
に散らさば　すべをなみ　攀ぢて手折りつ　見ませ我妹子（八・一五〇七）

家持のホトトギス好きは、本質的なものである。橘をホトトギスが散らしてしまうのを恐れ、引きちぎって手で摘んで橘を坂上大嬢に見せたい、と願っている。その状況として、清い月夜に見せたいのである。「まそ鏡は、清んだ鏡であるから清らかな月光を形容しているのであるが、ここでは大嬢が橘と重なり、月下樹の麗人が誕生する。月の光に照らされて樹下美人ならぬ橘の花美人である。

三 越中時代

家持には、月に独自の内容を付与して用いることがあった。二十九歳から三十四歳までの五年間に及ぶ越中時代では歌詞として「暁月」(十九・四一八二)も家持だけの例である。その一方で月とホトトギスの組み合わせは、弟書持(八・一四八〇)に始まりながら、家持が越中時代にさらに開花させる。

家持は、習作時代の月は、「月夜」として詠む傾向がある。それは相聞歌で詠うことに重なる。ところが越中の守時代には、「月夜」も用いるが、「月」としてうたに取り入れている。習作時代には月夜が七例、三日月が一例である。越中では月夜が三例、月が七例、その他三例(暁月、夕月夜、日月)である。少納言時代では、月が二例、月夜が一例である。

ちなみに月との組み合わせで多いのは、ホトトギスである。月とホトトギスの組み合わせでうたわれた歌は六首を数えるが、そのうち三首は長歌である。

越中守時代

天平十九年(三十歳)

四月十六日 三九八八

天平二十年(三十一歳)

三月二六日 四〇五四

天平勝宝二年（三十三歳）

三月二〇日 四一六六

四月三日 四一七七

同月四日 四一八一

同月九日 四一九二

ここで明確なことは、夏が四月から六月でありながら、初音を待ち望む立場からの創作が多々あることもあって、ホトトギスの歌が三月と四月にほぼ限定される。数が少ないが、菖蒲、玉などと結びつく五月（閏五月を含む）もうたっている。夏の鳥としては、もっと盛夏の五月、晩夏の六月にも歌の素材になっていいはずである。奈良時代のホトトギスは、とりわけ六月に鳴かなかったのであらうか。

現在では立秋を過ぎた八月上旬くらいまでは、山辺のホトトギスは確実に鳴いている。これは、ホトトギス歌の主題として、晩春三月になるとホトトギスの鳴き声が待ち焦がれたためと、四月に入っても思うように初鳴きが聞なかったことへの嘆き、或いはその初鳴きに感激しているこの時代の好みとも関わるのであらう。鳴き声が日常茶飯事のこととなると創作意欲がなくなっていたのであらう。万葉集一般では鳴き声に拘りつつホトトギスと卯の花等の組み合わせにも感動していて、特定の植物が咲く時期にほぼ限定されている。橘（六十九首中二十八首がホトトギス歌）卯の花（二十二首中十八首がホトトギス歌）、菖蒲（十二首中十首がホトトギス歌）、棟（四首中二首がホトトギス歌）と関わる。

ちなみに天平十九年を旧暦で調べるために『古代中世暦』（日外アンシエーツ）によれば、この年の立夏は、三月二十一日である。従って、節氣でいう立夏は来ていたのであるが、一般的に、或いは家持も暦四月一日（朔日）から夏と解している。従って、三月でも立夏を過ぎていれば、夏の季節と考えられるのであるが、立夏どころか、四月に入つた十六日に初めてホトトギスの鳴き声を聞くのである。家持は、三月二十九日の歌（十七・三九八三）の題詞に、「立夏四月既に累日を経たるに、由し未だ霍公鳥の喧くを聞かず、因りて作る恨みの歌二首」と記している。ここは三月中でありながら、四月に入つた気分なのであるうか。夏になれば、必ず鳴く、という主旨からホトトギスの鳴き声を聞かれないことを恨む歌を三月（節氣からは、立夏は過ぎていたから夏である）に作つていた。やつと四月半ばになり鳴き声を聞いたのであるから、その喜びはいかほどであつたか、と想像されるのに、内容は不思議なほどの静けさを漂わせている。まず天平十九年四月十六日の作品を取り上げたい。

四月十六日に、夜の裏に、遙かに霍公鳥の喧くを聞きて、懷を述べたる歌一首

ぬばたまの月に向かひてほととぎす鳴く音遙けし里遠みかも（十七・三九八八）

このホトトギスには、弟書持の影があることを、中西進氏は指摘している。^(注5) 或いは、佐々木民夫氏は、月に向かつて鳴くホトトギスは、「集中家持にのみ独自のもの」として、その趣向が唐詩に詠歌の発想を学ぶとした。^(注6)

月とホトトギスの組み合わせは、書持の歌（八・一四八〇）に始まつていた。この一四八〇番は、書持が天平十年から十六年までの制作であろう。書持の創作年が知られる最初の歌（八・一五八七）は、天平十年十月十七日に橘諸兄の旧宅での宴である。天平十年であれば、家持二十一歳であるから、弟としてもそれほど年齢差がないのであれ

ば、歌の創作は可能である。家持の処女作は十五歳である。

但し、天平十八年でも肩書きがないので、はっきりしたことはわからないが、せいぜい数歳の違いであろう。家持越中赴任に際しては、弟の挽歌で「出でて来し 吾を送ると 青丹よし 奈良山過ぎて 泉川 清き河原に 馬留め別れし時に 真幸くて 吾帰り来む 平けく 斎ひて待てと 語らひて 来し日の極み」(十七・三九五七)とあつて、山城国の泉川で別れの宴がもたれた。その時に、「無事に戻ってくる、その時まで元気でいて祈ってくれ」という内容の会話も挿入されている。

越中に実際着任したのが七月末であろうから、弟の死は九月の出来事であり、二ヶ月ほど前の会話と言ふことになる。

我がやどに月おし照れりほとときす心あれ今夜来鳴きとよもせ (二四八〇)

ホトトギスは回想の鳥であり、中西進氏は「一首が幽玄なたたずまい」が書持 (二四八〇) の影によるとした。^(注7) ホトトギスの鳴き声を家持は、「鳴き響むなる声の遙けさ」(八・一四九四) という。確かに「音遙けし里遠みかも」は、声が遙かで里が遠いということも死者の影を認めれば、分かり得る内容である。そして、ここにあるのは、月に向かつて鳴くホトトギスであるから、月とホトトギスから弟書持の歌も連想される。この影響は、越中で月とホトトギスをうたった長歌二首にも受け継がれる。「暁の 月に向かひて 行き帰り 鳴きとよむれど」(四一六六)「夕さらば 月に向かひて あやめ草 玉貫くまでに 鳴きとよめ 安眠寝しめず 君を悩ませ」(四一七七)とある。月に向かつて鳴くというのであるから、月が比喩されるものの存在もあったのではないか。

月は死者を暗示する譬喩にも用いられている。例えば、人麻呂は日並皇子の挽歌で、

あかねさす日は照らせれどぬばたまの夜渡る月の隠らく惜しも「或本は、件の歌を以て後の皇子尊の殯宮の時の歌の反とす」(二・一六九)

としたい、太陽に日並皇子を譬えながら、その死を月で暗示している。

月に向かつて鳴くホトトギスは、家持にとっては弟を呼び鳴き、さらに弟を思い出させるのであろうが、天平十一年の亡妻、或いは天平三年七月の父旅人などの死も影響している、と指摘したことがある。^(注8) 月は、人に喩えられ、月人男などとも呼ばれる。このことも故人を偲ぶ対象になるのであろう。

ウグイスは、人の訪れを、ホトトギスは死者を呼び出す、或いは思い出させる鳥なのである。

ほととぎすこよ鳴き渡れ燈火を月夜になそへその影も見む(十八・四〇五四)

四〇五四番は、天平二十年三月二十六日に越中掾の館で、田辺福麻呂を歓迎する宴が開かれた時に披露された。簞火を月に譬えるのであるから、ホトトギスも月も虚構の存在で良いことになる。そもそも月と橘、月とホトトギスは家持が積極的に取り合わせた。月の組み合わせということでは、次の長歌も参考になる。

桃の花 紅色に にはひたる 面輪の内に 青柳の 細き眉根を 笑みまがり 朝影見つ 娘子らが 手に取

り持てる まそ鏡 二上山に 木の暗の 繁き谷辺を 呼びとよめ 朝飛び渡り 夕月夜 かそけき野辺には
ろはろに 鳴くほととぎす 立ち潜くと 羽触れに散らす 藤波の 花なつかしみ 引き攀ちて 袖に扱入れつ
染まば染むとも (十九・四一九二)

この引用長歌は、「紅」は、家持の好んだ色であり、「青柳の細き眉根」は、三日月眉と同様に細い中国風の眉である。「夕月夜」は名前の知られる歌では湯原王 (八・一五五二) とこの家持だけである。「はろはろに鳴く」ほととぎすは、遙かと同様の表現であり、家持の好んだホトトギスの鳴き声の形容である。「立ち潜く」は、ホトトギスの習性を熟知した内容があり、さらに「袖に扱入れ」などは、家持の好きな、或いは独自の表現に充ち満ちている。家持独自の表現としては、「暁月」があった。これは、万葉集に一例だけである。

さ夜ふけて暁月に影見えて鳴くほととぎす聞けばなつかし (十九・四一八二)

越中時代の月歌の特質は、組み合わせとして月とホトトギスにあるが、歌としては、次の月の歌が著名である。

珠洲郡より船を発し、治布に還る時に、長浜の湾に泊まり、月の光を仰ぎ見て作る歌一首
珠洲の海に朝開きして漕ぎ来れば長浜の浦に月照りにけり (十七・四〇二九)

家持は、越中に足掛け六年いたが、春の出挙の記事は二回である。最初の年は七月赴任であり、翌天平十九年の春

は病氣であつた。三年目の天平二十年の二月と思われるが、春の出挙に出掛けてゐる。おそらく期間が三週間ほど、そして三百キロほどの旅であり、越中国と能登国を巡つてゐる。家持は、能登を含む越中守である。能登半島の北の端が珠洲である。その当時の能登は一周するのには、陸路よりも船が便利であつたのであろう。最終的に国守として春の出挙の任を終えて帰任する船旅に素材している歌が「珠洲の海に」（四〇二九）である。

問題は、題詞にある「治布」と歌にある「長浜」の場所が確定していないことである。明け方に出帆して、気がついたら月が照つてゐたという。十数時間の航海であらうが、長かつた出挙の旅が終わろうとしている開放感が漂う。お月見を楽しみたいという雰囲気で月が登場してゐて、これまでの家持のいかなる月歌にもないおおらかな余裕を感じさせてゐる。大事な仕事を無事終えようとするのであろうか、志貴皇子の「春になりにけるかも」（八・一四一八）をふと思ひ出させる開放感である。さらに雪月花歌の嚆矢である家持とは、王朝の美意識の起源をうたう歌人として誕生してゐたのである。

月はいかなる風土にも天に輝く。『東征伝』には、栄叡と普照という日本僧が鑑真を揚州大明寺で招請した時、和上の言葉として長屋王が袈裟に縫いつけた四句「山川異域。風月同天」の故事を語る。この思想は、大伴池主と家持の共有するものであつた。東征伝では、日本の年号で天平十四年の出来事とする。池主と家持の贈答は、天平二十一年三月十五日と同月十六日の贈答であり、それぞれ一首引用する。この山川が風土であり、風月が共通の環境であるといふのは、現代まで普遍的に語り継がれてゐる。故郷は、安達太良山と阿武隈川で表された有名な詩もあるが、現在では青空まで加わつてゐた。

一 古人の云はく

月見れば同じ国なり山こそは君があたりを隔てたりけれ（十八・四〇七三）

一 古人の云はくは答へて

あしひきの山はなくもが月見れば同じき里を心隔てつ（十八・四〇七六）

自然ということとは、風土と関わる。越中は平城京を故郷とする家持には、自然が異なる。また、初めての国守として赴任した土地であった。ホトトギスの到来も、春の桜も梅も時期が若干ずれる。宴会でも国守が中心であり、その下僚として役人がその場にいた。しかし、家持は思いやりのある部下思いの上司である。大伴池主が越前に去ってからも、越中の家持と贈答をしている。さまざまな刺激を得て作歌したのが越中時代である。月歌も風土を越えた存在として自覚され、家持の風流な歌に詠まれていたのであり、充実した内容を示していた。もちろん雪月花を一首で含む歌（四一三四）も越中時代に詠まれた。

四 少納言時代

天平勝宝三年八月五日に越中を離れ、帰郷の旅が始まった。三十四歳になっていた。その後は、暦の月ではないここで言う月の歌は二首を残すばかりである。暦の月をうたう場合も天体の月も全て季節は秋のものである。そのうち暦の一首と天体の一首は七夕歌である。秋、そして七夕に月をうたった歌を残したということである。その七夕歌の

二首を引用する。

秋風に今か今かと紐解きてうら待ち居るに月傾きぬ（二十・四三二一）

引用した七夕歌は、三十七歳になった天平勝宝六年七月七日の七夕に独り居て天の川を見て詠まれた一首である。全体が八首構成であり、第六番目の歌である。「うら待ち居るに月傾きぬ」は、慣習的な表現であり、天体の月を意識しているというよりも、時間の経過を述べるのが主眼である、適当な逢う時間が過ぎ去っていくことを述べる。さらにこの七夕群では、次の一首が第七首目として続く。

秋草に置く白露の飽かずのみ相見るものを月をし待たむ（四三二二）

この「月をし待たむ」とは、空の月を待つのではない。ここでは時間の経過を述べるものである。また、逢えなかったのだから、次の七月七日を「月」として表したものである。

家持は、天平勝宝六年四月五日に兵部少輔に任じられていた。少納言時代には、月の歌を一首も詠まなかったのであるが、この七夕歌も天体の月といいながら、時間の経過を言いたいのであるから、爽やかな月光の許にある叙情ということではない。都に戻り、八年ほどの間に、時間の経過を含まない純粹に天体の月をうたったのは次の歌のみである。

秋風の吹き抜き敷ける花の庭清き月夜に見れど飽かぬかも (二十・四四五三)

三十八歳になった天平勝宝七年八月十三日に宮殿で開かれた肆宴で披露したく作られたが、残念ながら徒勞に終わったか、或いは宴席がおわってから作ったことも想像される。肆宴を意識していることは、「見れど飽かぬかも」という人麻呂に始まる讃仰の言葉で理解される。もちろん天平勝宝七年のことであるから、天皇は孝謙天皇であるが、天皇とともに聖武太上天皇、或いは橘諸兄なども含まれていて、言祝ぎしているのであろう。下の句の讃仰とは裏腹に、上の句は家持の個性が伺われる。

「秋風の吹き抜き敷ける花の庭」を清澄な月の光が照らしているという表現は、家持の個性である。それは、「抜き敷ける花の庭」が花びらが散って「はだら」な色彩の模様をいうことと、さらに庭が花の香りを漂わせているからである。

中西進氏は、三野石守の歌「八・一六四四」にも「扱入れ」という語があるとして、さらに「しごいて袖に入れるのは、香りを移すため」として、「自然に秋風がしごいたのは例のないみごとな表現」という。^(注9)袖の代わりに「花の庭」とあるのであるから、ここでは庭園が香りを漂わせているのである。梅の香を詠む例に一例取り上げるが、ここは秋であるから、萩の花を想像するのが一番可能性としてあるであろう。萩もしごけば香りが強まるのであり、鹿と同様に人間も引き寄せられるのであろう。

さて、宋成徳氏は、「庭を照らす月」が中国文学の影響があるととして、庭と風を詠む中国詩の用例を複数あげている。^(注10)花の庭、風と庭の中国詩の伝統を学ぶ家持の姿が指摘される。しかし、誰々の具体的な詩の影響というよりも、必然的に素材が花と庭、或いは月と庭の歌を万葉集の歌にも収録されていると考えられる。そういう言語の文化が万葉集

でも試みられているのである。ちなみに香りも中国詩に多数見られるにせよ、大伴家持は、万葉の歌人では珍しい花の香りを複数の歌でうたっている。花の香りを踏まえているのではないかと、次の三首がある。「たちばな」をうたう巻十八・四一一一番、「ふぢ」をうたう十九・四一九二（別案四一九三）、そして「あしび」をうたう二十・四五二番である。それらには、共通して袖に「扱き（い）れ」という表現がある。それは、ある香りの目的をもって花を袖に扱き入れたと考えるからである。

あしびは、万葉集では十首にうたわれた。有名なのは、大伯皇女の磯に生えたあしびを詠んだ歌（二・一六六）である。家持の一首は、天平宝字二年二月の作である。中臣清麻呂の邸宅で行われた宴で披露された。このときの家持は、磯松に託して、主の繁栄を祈念する歌（四四九八）をよんでいた。その場では「八千草の花は移ろふ」（四五〇二）として、花を用いずに「常磐なる松のさ枝」に永久の願いをこめていたし、「はふ葛の絶えず」（四五〇九）と聖武天皇が御覧になった高円の野辺をお慕いしましょう、ともうたう。家持は、植物として松と葛を利用することはあっても、花は移ろうとして用いていない。ところが、話題が「山斎を属目て作れる」（四三一一・題詞）となっている歌では、花が登場した。

池水に影さへ見えて咲きにほふあしびの花を袖に扱入れな（二十・四五二二）

そもそも万葉集の歌人は、花を手折るのが好きであり、引きちぎって枝に咲く梅や黄葉を少女に見せたりしている。或いは花の簪にもして、「たをる」と歌詞にある歌が三十首もあり、家持歌はそのうちで八首である。花をさらにひきちぎって袖に入れているのは、その中で二首の長歌（四一一一、四一九二）である。ひきちぎった花を袖に入れ

て、香りを詠むのは、四一一番と四五二番の二首にあてはまりそうである。

ちなみに「咲きにほふ」は、色を指している言葉であっても、ここで袖に入れるのは、あしびの花の香りを楽しむためである。中西進氏が指摘しているが、古今集のよみ人知らずの、

さつきまつ花橘の香をかげばむかしの人の袖の香ぞする（三・一三九）

が思い浮かばせていい一首である。^{（注11）}

それに対して木下正俊氏は、古今集の素性法師の、

もみち葉は袖にこきいれてもていなむ秋は限りと見む人のため（五・三〇九）

を引用して、秋が残っていた証拠のために京都へ持つてでる紅葉を袖に入れた歌を参考にする。素性の歌を引用した意図は、あせびも何らかの証拠の記念とでもいうべきものである。「袖に扱き入れて」は、類似表現である。古今集のごとく京都にいる人に見せるために、素性は秋の証拠を袖に扱き入れたということである。^{（注12）}同様に、伊藤博氏は、いとしさのあまりに今日見る物を身に付けたい、という歌が多いとする。^{（注13）}家持の歌は、人に証拠として他人に見せる、或いは愛しさ故に身に付けたのであろうか、ということも想像されるにせよ、家持の「こきいれ」の例からは匂いを意図していると考えられる。紅葉は、色を楽しむのであり、香りなどが問題にならない。

結 び

天体の三日月、或いは三日の月ということから、女性の眉を想像することは、連想として案外難しかったのである。家持は眉から天体の三日月へ連想が働き、さらに女性を「人」としているところに、叔母であり、父の妹でもある坂上郎女との贈答で十六歳にして、あっぱれな返歌を試みた。家持の習作時代の月歌は、次の三日月歌に代表される。

振り放けて三日月見れば一目見し人の眉引き思ほゆるかも（六・九九四）

三日月は、万葉集に三首ある。この例が特殊であるのは、天体の月と眉が結びついていることである。細い眉を描くのは、唐の化粧である。しかし、漢詩をあつめた懷風藻は、美しい眉を蛾眉と表すことがない、また三日月眉などと形容することもない。眉間の美しさを月の光（魄）で形容している場合は一例がある。

次に越中時代は、月とホトトギスの組み合わせに家持の個性が発揮された。その一方で月光の美しさと旅愁を感じさせる名歌も誕生していた。しかし、家持独自の歌ということでは、春の出挙で詠まれた一首と雪月梅花を一首に詠む歌が月歌の代表であろう。

珠洲の海に朝開きして漕ぎ来れば長浜の浦に月照りにけり（十七・四〇二九）

雪の上に照れる月夜に梅の花折りて送らむ愛しき児もがも（十八・四一三四）

三十四歳の秋から四十二歳の正月までを少納言時代と呼称した。実際は天平勝宝六年四月五日に兵部少輔に任じられていた。

天平勝宝七年八月十三日に宮殿で開かれた肆宴で公表したく作られたが、残念ながら披露されずに終わった。肆宴での気持ちは、「見れど飽かぬかも」という人麻呂に始まる讃仰の言葉で理解される。もちろん天平勝宝七年のことであるから、天皇は孝謙天皇であるが、天皇とともに聖武太上天皇、或いは橘諸兄なども含まれていて、言祝ぎしているのであろう。下の句の讃仰とは裏腹に、上の句は家持の個性が伺われる。それは上句にある秋風で扱き取られた花の庭が薫りまでも感じさせ、そこに月光が加わっているのである。月夜の花香は、家持だけがうたった世界である。

秋風の吹き扱き敷ける花の庭清き月夜に見れど飽かぬかも（二十・四四五三）

また、月は風狂をもたらしした。門田をうたう一五九六番も注目される。

注

- (1) 卷七雑歌『詠月』歌群の構造―臨場表現から―（「万葉」百一号）
- (2) 「人麻呂歌集の略体歌とその表記法―和風義訓熟字『出月』をめぐる―」（『実践国文学』三十三号）

- (3) 「山部赤人卷八雑歌四首の特質」(「広島女学院大学日本文学」第十号)
- (4) 『大伴家持(2)』 五四から五五頁
- (5) 『大伴家持(3)』 二〇三から二〇五頁
- (6) 「月に向かつて鳴くホトトギス―家持の月の歌ノート」(「万葉研究」十一号)
- (7) 『大伴家持(3)』 二〇三から二〇五頁
- (8) 「大伴家持ホトトギス歌の特質―独詠に注目して―」(「広島女学院大学日本文学」十四号)
- (9) 『大伴家持(6)』 四四二頁。
- (10) 「月を詠む万葉歌と中国文学」(「国語国文」七十七卷六号)
- (11) 『大伴家持(5)』(二五七頁)では、「当時は袖に植物を入れて香りをつける。しかもその人特有の袖のにおい」として、古今集卷三・一三九番を引用している。
- (12) 『万葉集全注卷二十』 四五二番注 三三三頁
- (13) 『万葉集釈注(十)』 八〇六頁

第三章 花の歌

はじめに

万葉集の約四十パーセントは、何らかの植物がうたい込まれている。稲垣富夫氏は、「万葉集二十卷四千五百首余りの歌中には、およそ千五百首、種類にして百五十あまりの草木の名が出る歌が含まれ」とする。^(注1)大貫茂氏は、その数は、約千七百首、その種類は百六十種類程である、という。^(注2)両者には百首と十種類ほどの数の違いが見られる。万葉集の約一割を詠んだ家持ではどうであろうか。

家持は四百七十三首中で、植物が歌詞で用いられたものを、大伴家持の植物歌と呼称する。その歌番号に基づき植物を表で示す。ちなみに政所賢二氏は、ほぼ同様な表で、家持の歌を三期に分けて、植物別の歌番号表を既に作っている。^(注3)

一首で三種類の植物を詠んでいるものもあるが、歌の数としては二百二十首程である。家持全歌の約半数は植物と関わる。その中でも越中時代は積極的であった。十七種は越中だけでうたわれた。とりわけかたかこ（片栗）、ほよ（寄生木）、つまま（タブ）、あしつき（川モズク）、すもも、もも、ゆりをうたう歌は、今日的な評価が与えられている。その他として、ふぢ、あやめ、やなぎなども越中で詠まれた植物である。

家持のみに詠まれた植物もあるが、あぢさゐ、たまばはき、ほほがしは、は二首ある中で、一首が家持のうたである。さらに、ひかげ、やまたちばなは、家持の歌が主である。

大伴家持植物分類歌番号

植 物 名	習 作 時 代	越 中 時 代	少 納 言 時 代
あ か ね		4166	
あ し		3977.4006.4094.	4331.4362.4398.4400.
あ し つ き		4021	
あ し び			4512
あ ち さ ゐ	773		
あ づ さ	478	3957.4094.4164.4214.	
あ ふ ち	3913		
あ や め ぐ さ	1490	4089.4101.4102.4116.4166.4175.4177.4180.	
い ね ・ ほ	1567.1625.	3943	
う の は な	1477.1491.	3978.4066.4089.4091.4217.	
う め	786.788.1649.	4134.4174.4238.	4278.4287.
か き つ は た	3921		
か た か ご			
か ほ ば な	1630		
か や	780		
く ず			4509
く れ な ゐ	3969	4021.4109.4139.4156.4157.4160.4192.	
さ く ら		3970.4077.4151.	4361.4395.
す ぎ		4148	
す げ ・ す が	414	4116	
す も も		4140	
た け			4286.4291.
た ち ば な	1478.1486.1489.1507.1508. 1509.3912.3916.3918.3920.	3984.4063.4064.4092.4101.4102.4111.4112. 4166.4169.4172.4180.4189.4207.	4266
た へ	475.478.1629.	3978.4111.4113.	4331.4408.
た ま ば は き			4493
ち さ		4106	
ち ち		4164	4408
ち ば な ・ な ・ ち つ ば な ・ な ・ ち あ さ ち	1462		
つ が		4006	4266
つ げ		4211.4212.	
つ た		3991	
つ ば き		4152.4177.	4481
つ ま ま		4159	

植 物 名	習 作 時 代	越 中 時 代	少 納 言 時 代
つ る ば み		4109	
な		3969	
な で し こ	408.464.1448.1496.1510.	4070.4113.4114.	4443.4450.4451.
に こ ぐ さ			4309
ぬ ば た ま	781	3962.3980.3988.4072.4101.4160.4166.	4331
ね ぶ	1463		
は ぎ	1565.1597.1598.1599.1605. 1628.	3957.4154.4219.4249.4253.	4297.4315.4318.4320. 4515.
は じ			4465
な ね ず	1485		
は は そ		4164	4408
は り		4207	
ひ か げ			4278
ふ ぢ	1627	4043.4187.4188.4192.4193.4199.4207.	
ほ ほ が し は		4205	
ほ よ		4136	
ま つ	1043	4014.4177.	4266.4457.4464.4498. 4501.
ま つ か へ		4169	
も		4211.4214	
も み ち	1554.1591.	4145.4160.4161.4222.4223.4225.	4259
も も		4139.4192.	
や な ぎ		4071.4142.4192.4238.	4289
や ま す げ			4484
や また ち ば な		4226	4471
や ま ぶ き		3971.3976.4185.4186.4197.	4303.4304.
ゆ づ る は			
ゆ り		4086.4088.4113.4115.4116.	
よ も ぎ		4116	
わ す れ く さ	727		
を ば な ・ す す き	1572	3957	4308
を み な へ し		3943	4297.4316.
は な	466.469.475.477.478.1629. 3917.	3963.3965.3966.3969.3978.3982.3985.3991. 4106.4111.4113.4153.4156.4160.4166.4167. 4185.4187.4194.4211.4214.4254.4255.	4307.4314.4317.4360. 4397.4435.4453.4484. 4485.4501.
く さ	780.785.	4000.4011.4094.4166.4172.4197.	4312.4314.4331.4398. 4408.4457.
き ・ こ	478.722.773.779.780.1487. 1494.1495.	3911.3957.3991.4026.4051.4111.4136.4161. 4166.4187.4192.	4305.4314.4495.

さて、植物の種類と言うことからは、はな、き、くさ、もみちの言葉を除くと、そのいずれの時代にも共通している植物名は、九種類である。習作時代にのみうたわれた植物が七種類、少納言時代にのみうたわれた植物が八種類であることから、越中時代にのみうたわれた植物が十七種類を数えるのは、それぞれの時代でうたう植物の種類に違いがあることになり、また歌数に比例していることにもつながる。植物は、その種類ということでは、それぞれの時代に即しているということである。

即ち、越中時代の家持は、植物にも北国の風土の特徴が現れている。一方習作時代の特徴と少納言時代の特徴を植物で言えば、それぞれあじさゝもとたけと言うことになる。一方作家として二十数年間をとおしていつも用いた植物と言えば、うめ、なでしこ、はぎ^(注4)ということになる。下田忠氏は、萩の歌人に家持を加えてはいないが、志貴皇子と大伴旅人の名前を挙げている。私は、四四五三番で花香を詠っているので家持もはぎの詩人と呼びたい。

この考察では、植物と言うよりも主に花に対する創作の意図と特質を、歌人として三期に分ける伝記的な変遷を配慮して考察する。

一 習作時代

家持は天平四年から作歌している。天平十八年越中守に赴任する十五歳から二十九歳までを習作時代とする。その特徴は、相聞歌を多く作っているが、さらに先人の作品を学ぶ姿勢も強いので、表現の類似ということから、模倣という評価も生じる。類歌、類語などによってそれらは知られる。歌として植物名がもちいられているものは、「なでしこ」「いね」「はな(桜)」「あぢさゝ」が取り上げられて良い。

さて、次の二首は、天平五年頃の作品であり、家持十六歳である。女性^(注5)は坂上家の大嬢であり、後に妻になっている。

石竹のその花にもが朝な朝な手に取り持ちて恋ひぬ日無けむ（三・四〇八）

我がやどに蒔きしなでしこいつしかも花に咲きなむなそへつつ見む（八・一四四八）

大嬢は旅人の妹坂上郎女が母であり、その母が習作時代の家持を指導していた。大嬢の年齢は数歳年下と思われる。それは、天平十一年頃に二人は結婚するのであるが、天平五年頃から十一年頃に創作された相聞から、家持は女性として何らかの物足りなさを感じているように思えるからである。歌詞にある「なでしこ」は、あきらかに大嬢と対応している。養老二年生まれであるから、天平五年は、家持が十六歳と考えられる。もちろんなでしこは、習作時代に五首、越中時代に三首、少納言時代に三首を数え、また万葉集全体でも二十六首にうたわれた。鈴木武晴氏は、八・一六一〇番の丹生女王によって始まった「女性を『なでしこ』によそえる手法」が家持によって確立したとする。

その習作時代でも初期にうたわれ、さらに最初に譬えられたのがなでしことしての大嬢の存在である。その一方で一度別れた坂上大嬢をなでしここと表現しながら、再会する頃に、相聞歌ではない挽歌でもこの花を用いた。それは、天平十一年の亡妻挽歌である。

秋さらば見つつ偲へと妹が植ゑしやどのなでしこ咲きにけるかも（三・四六四）

なでしこは、家持によって盛んに女性に譬えられ、さらに故人を偲ぶ縁にもなった。まさしく「撫でし児」と解釈する可愛がった女性に相応しい花の名前である。越中時代にも、少納言時代にもなでしこをうたうが、故人を偲ぶなでしこは家持独自の花である。なでしことは、女性に対する男子の立場からの「撫でし子」なのである。

一方、奈良時代の貴族の特徴であるが、貴族でありながら、生業と考える稲作があつたし、邸宅にも門田があつた。その意味では農業に基盤をおく貴族の一面が強く残っている。

我が業なる早稲田の穂立作りたる縵そ見つつ偲はせ我が背（八・一六二四）

我妹子が業と作れる秋の田の早稲穂の縵見れど飽かぬかも（八・一六二五）

家持は天平十一年六月に妾の死を経験していても、同年九月には恐らく坂上大嬢と婚姻関係にあつたらしい。「我が業なる」が大嬢作であり、「我妹子」が家持の贈歌である。農業的な貴族の性格は、引用した二首からもうかがい知れる。

生業であり、早稲田の稲穂でできた蔓（一六二四）とは、大事な稲穂でできた貴重な心もった大嬢の贈り物である。大嬢の心情の重さそのものであるから、それを率直に「見れど飽かぬかも」（一六二五）とうたう家持は、妻としての大嬢がいたと見なして良い。普通「みれど飽かぬかも」は、賛美の心である。妻を仰々しい伝統的な讃仰に結びつく伝統的な言葉を庶幾しているのであるから、普通の交際とは思えない。

つまり家持にとっては、天平十一年は二十二歳であるが、妻の死を乗り越えて、再会していた大嬢を新妻として迎

えたのである。その新妻からの贈り物に、早稲田の蔓があり、それを率直に受け入れた家持が居た。天平の高貴な女性である大嬢が穂の蔓を贈り、それを賛嘆して感謝する晴れ姿がここにある。

そもそも稲を生業とするところが天平貴族にあったことは、注目して良い。その稲の呪力を身につける、そしてそれが生業であるところに、農業の儀礼と結びつく性格を認めたい。一方で家持は桜の特徴を踏まえた優れた歌を、天平十六年春二月三日に残している。

あしひきの山さへ光り咲く花の散りぬるとき我が大君かも（三・四七七）

引用したのは、十七歳で亡くなられた安積皇子を、内舍人であった二十七歳の家持が人麻呂の挽歌に学び詠んだ伝統的な長歌（三・四七五）の反歌である。将来を暗示させて山全体を華やかに彩りながら、それが一瞬にはかなく散っていく桜花の形容を皇子の唐突な逝去と重ねた。桜のはかなさが死のイメージに結びついた。しかし、それは全山を彩る桜がはかなく散る姿で、将来を嘱望された皇子の突然の死を彷彿させた。この歌の評価は、沢瀉久孝氏が好意的である。^{（注6）}

全山に咲く桜と死のイメージは、家持の個性と呼ぶべきである。但し、万葉に記録された桜児伝説も存在しているので、桜と死の結びつきは万葉歌にはじまるわけではない。さらに家持のこの経験は、天平十九年春に越中で自分の死を桜と重ねて描こうとする先蹤にもなった。

つぎに注目するのは、あぢさゐの歌である。そもそもあぢさゐは万葉集に二首しかうたわれていない。

言問はぬ木すらあぢさゐ諸弟らが練りのむらとに欺かれけり（四・七七三）

あぢさゐの八重咲くごとく八つ代にをいませ我が背子見つつ偲はむ（二十・四四八）

家持（七七三）と橘諸兄（四四八）の二人に詠まれている。万葉の表記が「味狭藍」と「安治佐為」であり、題詞にも「味狭藍花」（四四八）とある。「藍」の字をもちいているのは、花の色を配慮しているからであろう。この花は、万葉に二首がうたわれていても、さらに諸兄の作は、古今六帖・夫木抄にも記録されていながら、勅撰集には一首も紫陽花の歌がないのである。

現在各地に紫陽花寺があり、紫陽花街道、紫陽花公園等で梅雨の頃になじみの花である。ところが、八代集といった勅撰の権威ある歌集には紫陽花の歌は全くない。万葉集では、家持に取り上げられ、橘諸兄が八重咲きのあぢさゐをうたったが、嫌われる理由、或いは忌むべき花であったのであろう。

家持があぢさゐをうたった歌は、久遠京から贈っているもので、二十四歳の天平十三年から十六年までの歌である。大嬢に五首が同時に贈られている。引用したのは、第四首であるが、参考に第五首目も引用する。

百千度恋ふと言ふとも諸弟らが練りの言葉は我は頼まじ（四・七七四）

「諸弟らが練りのむらとに」と「諸弟らが練りの言葉は」がほぼ同じ内容らしく、「欺かれけり」と「我は頼まじ」とが対応している。とすれば、「むらとに」と「言葉」は、とりもなおさず言葉にその縁のある「むらと」ということであろう。

ちなみに近代の諸注釈は、のきなみに解釈に苦勞^{注8}している。橋本四郎氏と坂本信幸氏の考察を踏まえて、伊藤釈注が纏めるのは簡潔に「まして口八丁の諸弟めの練りに練ったご託宣」と訳して「諸弟らが練りのむらとに」を解釈している。その一方で、阿蘇瑞枝氏は、「練の村戸」と「練りの言葉」の対応を言葉と言葉以外のものとして対照的である。^{注7}また、上の句は、「くちのきけない木にさえも、あじさいのように色の変わる信用のおけないやつがある」と「言問はぬ木すらあぢさゐ」と解釈する。

ちなみにこれらの解釈と全く異質なのは、中西進氏である。諸弟を占い師として、「むらと」を「腎臓」として、あやしげな諸弟が腎臓占いをする新説を開陳^{注8}している。

そこで問題は解釈が未解決になっているが、家持はあぢさゐを色の变化する変節の花と理解していることである。その一方で橘諸兄は、「あぢさゐの八重咲くごとく」とあり、八重咲くあぢさゐを言祝ぐ。そして、この諸兄の歌は伝承歌として、古今六帖にも、夫木抄にも流れていくのである。対して家持の歌は、万葉にのみに記録されたらしい。

一方は縁起の良い花、一方は色変わりする変化の花、という両面がある。家持は、縁起の悪い花として用いた。家持が用いたあぢさゐに対して、諸兄は栄華を見ている。同じ花であるのに、対比的である。家持は、ガクアジサイであれ、ヤマアジサイであれ、白色から青色に変化する萼片を七変化ととらえて心变わりの比喩とした。諸兄は何を八重とするのか、わかりにくいだが、おそらく萼片が数個集散花序から出ていることを言うのであろう。

その諸兄の万葉歌は伝承歌として伝えられている。しかし、奈良時代に二首うたわれながら、貴族の趣味にはならなかった花である。嫌われたのは、家持歌に関わるのであれば、萼片が色変わりするので、縁起の悪いはなということになる。

そもそも虹が不吉なものとされている。とすれば、家持のいう色の変化が同じ株でも見られるのであるから、不吉

なものとされて、あぢさゐが忌避されたのであろう。忌むべき花すら歌に取りいれていたのが習作時代の家持である。

二 越中時代

万葉集中家持のみが歌語に取り入れた越中時代の独自の植物としては、「あしつき・かたかご・かへ（柏の類か）・すもも・ちさ・つまま・ほよ・よもぎ・あしつき」がある。植物を積極的に歌にうたったのが越中時代である。

まず越中時代の歌詞で注目したいのは、「春の花」と「秋の花」である。もちろん「春花」は、人麻呂の歌に詠われている。全十一首の中、人麻呂二首（二・一六七、一〇四七）、作者不明一首（一〇・一八八六）、家持八首である。そして、家持のいずれの例も越中時代に集中している。同様に、「春の花」二首は越中時代のみである。岡内弘子氏は、「春花」が日並皇子挽歌（二・一六七）で使用されていることから、春に咲く花が生命力に満ち、秋の豊饒を確信させる^{（注9）}として、人々が待望することから「貴し」の枕詞になった、としている。

春の花今は盛りににはふらむ折りてかざさむ手力もがも（十七・三九六五）

うぐひすの鳴き散らすらむ春の花いつしか君と手折りかざさむ（十七・三九六六）

「秋花」は、万葉集にない歌語であるが、「秋の花」は、二例がある。そのいずれもが越中から都に帰任する途中で作られた三十四歳の天平勝宝三年八月の詠歌である。

……やすみしし　我が大君　秋の花　しが色色に　見たまひ　明らめたまひ　酒みづき　栄ゆる今日の　あやに貴さ（十九・四二五四）

秋の花種々にあれど色ごとに見し明らむる今日の貴さ（十九・四二五五）

家持が春にことさら春愁としてこだわりを見せるのは、二十九歳で越中の守に赴任してからである。習作時代には、春に特別な思いを見せることもすくない。このことは、厳しい雪国の風土が春という季節を特別なものにしてしまったのかもしれない。また、「春の」が修飾する言葉は、圧倒的に「野」であるが、春の「柳」「葉」などの植物を形容するか、「霞」「雨」「長日」等の語と結びつく。家持に限定されて用いられたのは、「花」「はじめ」「園」「初音」である。春と花の結びつきは、さらに「春花」であれば、万葉集十一首中で、人麻呂一首、作者不明二首、そして家持八首という具合になる。しかし「春の花」は、越中時代の家持に二首あるだけである。

なぜ越中では「春の花」「春花」に拘ったのか。「春」と結びつく詞であれば、少納言として都に戻ってから因幡の国守として新年の歌を披露した三十四歳から四十二歳までで注意を引くのは、「初春」（四四九三、四五一六）「春の初め」（四一三七、四三六〇）といった暦に結びつく例である。植物に対する興味、或いは橘氏と結びつく「たちばな」も習作時代に十首、越中で十四首もうたいながら、少納言時代には天皇賛歌として天平勝宝四年十月頃に「儲けて」作歌した四二六六番のみであり、その他橘左大臣と関わる宴席等でも橘をうたうことがなかった。

同様に「ふぢ」も八首ありながら、越中で七首、習作時代に一首であり、また「あやめ」も越中で八首、習作時代に一首である。一方、なでしこ、はぎ、うめ等は、平均的に歌をうたっている。越中では、ゆり、やなぎ、ふじ、あやめが突出するのであって、それらはとりわけ春という季節に限定される分けでもない。

しかし、花といえは春と結びつくのが家持の越中時代の作歌動機であつたし、春愁の歌人と呼ばれるのもその春のもつ鬱情にあり、その一端が「春の花」という詞で表される花にもあつたことになる。

春に咲く花にまず注目したのは、越中に赴任して初めて冬を越した春に大病を患い、死をも一時期覚悟したらしいこととも関わる。天平十九年二月十九日の日付をもつ二首に「春の花」（十七・三九六五、三九六六）が用いられている。贈答の対象であつた大伴池主も「暮春の風景は最も拾ふべし」（三九六七序）と述べる。

越中時代の家持は、京師追慕があつた。夏であるが、ホトトギスとはなたちばなどの組み合わせにもそれがうかがわれる。しかし、それが春愁と結びつき、多作につながっていくのも、春の花なのであるが、さらに移ろいを歌にしたのは、「紅」に代表される歌詞である。その春の花を代表する具体的に植物名がうたわれた歌が卷十九の巻頭にある。

天平勝宝二年三月一日の暮に、春苑桃李の花を眺矚して作る二首

春の園紅にほふ桃の花下照る道に出で立つ娘子（四一三九）

我が園の李の花か庭に散るはだれのいまだ残りたるかも（四一四〇）

二日に柳黛を攀ちて京師を思ふ歌一首

春の日に萌れる柳を取り持ちて見れば都の大路し思ほゆ（四一四一）

堅香子草の花を攀ち折る歌一首

もののふの八十娘子らが汲みまがふ寺井の上の堅香子の花（四一四三）

引用した四首には、都と鄙が対比されていて、さらに京師にたいするあこがれが根本にある。ももは、名前の知ら

れる歌として、全て家持の二首（もう一首は、四一九二）であり、その他は作者不明の五首である。家持は越中でもを歌に取り入れた。そのももの花を「紅」とするのが、家持の個性である。「紅は移ろふものそ」（十八・四一〇九）
とうたうのも家持である。「紅の赤裳の裾」（十七・三九六九）ともあり、京にいる女官を想像させる色である。

また、中西進氏は、桃李の二首が「春苑桃李の花を眺矚して」を和歌に翻訳した句題和歌ではないかと言い、大越寛文氏は、家持が「桃李」に導かれた虚構の作として、旅人の梅花の歌（五・八二二）の影響から第三句を「二ハニチル」と訓む三句切れの歌とした。^{（注10）}

引用した四首の歌では、もつとも都を感じさせない北国の花である「かたかご」（四一四三）についても京師に対するあこがれはある。それは「もののふの八十」は、人麻呂の二六四番を連想させることばである。とすれば、ここにあるのは人麻呂がうたう宇治川とか、或いは人麻呂も使えた持統朝と文武朝の役人達である。かたかごという北国の花でも、人麻呂の歌と重ねさせる連想の働きをもつて、「もののふの八十」としていたのである。そして、寺井につどう少女達とは、紛う都の乙女の像にまで展開している。よく言われる「絵画的」という評価は、現実と乖離しているのではなく、連想が発展していった結果として京に思い至る絵画の景となるのである。四一四一番は京の柳を思い出しているが、山崎馨氏は、柳の歌を四十首とする。また「柳」は、しだれやなぎ、「楊」は、かわやなぎ、等表記の區別があり、柳がウグイス、うめ、等と結びつき、柳が纏にするなど強い生命力、或いは肩、街路樹などの結びつきは、中国文化の影響かも知れないとする。^{（注11）}

家持は、越中の風土に興味を示し、それを歌にした。しかし、その一方で越中であるから日常的な花になるかたかごでも、都との対照があったのである。

春愁と京師追慕という歌の主題がありながら、その一方で越中の風土にも興味を示している。歌語としては、風に

かかる「あゆの風」「越の俗の語に東の風をあゆのかぜと云ふ」(十七・四〇一七)が顕著なものであり、或いは「霍公鳥は、立夏の日に来鳴くこと必定す。また越中の風土は、橙橘の有ること希らなり。これによりて、大伴宿祢家持、懷に感發して、聊かにこの歌を裁る。」「三月二十九日」十七・三九八四左注」とあるのは、風土的な特質に注目していた証左になる。越中の風土から取り入れた植物は、つまま・あしつき・かたかご・ほよということになる。植物ではないが黄金を花に捉えた歌もあるが、特殊な花である。

天皇の御代栄えむと東なる陸奥山に金花咲く(十八・四〇九七)

一方で注目したいのは、ゆりとたちばなである。まずゆりが越中のみでうたわれた。たちばなは、越中での足掛け六年間にあれほどのぞんだ京師での生活でありながら、少納言として帰任してからは一首でうたうのみであるからである。

臣籍から橘の氏をゆるされ、天平九年以降橘政権を担当していたのが、橘諸兄である。そもそもたちばなは、垂仁天皇の命を受けて、田道間守が常世の国からもたらしたと記紀でいう。家持はそれを踏まえて、天平感宝元年閏五月二十三日にたちばなを主題とする珍しい長歌を詠んでいる。

かけまくも あやに恐し 天皇の 神の大御代に 田道間守 常世に渡り 八杵持ち 参あ出来し時 時じくの
香の菓実を 恐くも 残したまへれ 国も狭に 生ひ立ち栄え 春されば 孫枝萌いつつ ほととぎす 鳴く五
月には 初花を 枝に手折りて 娘子らに つとにも遣りみ 白たへの 袖にも扱入れ かぐはしみ 置きて枯

らしみ 落ゆる実 は 玉に貫きつつ 手に巻きて 見れども飽かず 秋付けば しぐれの雨降り あしひきの
山の木末は 紅に にほひ散れども 橘の 成れるその実は ひた照りに いや見が欲しく み雪降る 冬に至
れば 霜置けども その葉も枯れず 常磐なす いやさかばえに 然れこそ 神の御代より 宜しなへ この橘
を 時じくの 香の菓実と 名付けけらしも (十八・四一一)

反歌一首

橘は花にも実にも見つれどもいや時じくになほし見が欲し (十八・四一二)

この家持の歌の十三年前に、「冬十一月、左大弁葛城王等、姓橘氏を賜はりし時の御製歌一首」と題詞にあつて、その橘氏の永遠を祝している聖武天皇の歌がある。

橘は実さへ花さへその葉さへ枝に霜置けどいや常葉の木 (六・一〇〇九)

家持は、越中では橘諸兄の庇護に期待していたが、京都に戻つてからはちばなをほとんどたわなないことから、諸兄というよりも、橘奈良麻呂と距離を置いていくようになったのではないか。だから、ちばなが歌にも詠われにくくなったのであろうし、それに代わるものとして花を主としない植物として、松等がうたわれるようになるのである。しかし、ホトトギスとちばなの越中での結びつきは、風土を配慮する説もある。尾崎富義氏は、ちばなが常世の聖樹から夏を告げる季節の花となり、ホトトギスが夏の到来と大和を偲ばせる鳴き声であつた、とする。^(後註)

引用したちばなの長歌は、興味は歴史的な起源に触れることもあるが、「初花を 枝に手折りて 娘子らに つと

にも遣りみ 白たへの 袖にも扱入れ かぐはしみ 置きて枯らしみ」という表現が家持独自である。たちばなが薫りの良いものとして、そのまま枯らしておくというのは、ドライフラワーにしたら薫りがさらに強まるのであろうが、さらに袖に扱き入れているのであるから、袖の匂いを意図している。花香にも興味を示す歌人家持がいた。

さらに、ゆりも越中でのみうたわれた花である。これは、万葉にある十首のゆりの歌としては、「草深百合の花笑みに」(二二五七)と美しいゆりの微笑みか、「草深百合の後にとふ」(十一・二四六七)という「ゆり(後)」を導く序詞の二形式でうたわれている。

家持のゆりの歌は、五首を数える。その全ては家持三十二歳になった天平感宝元年に限られている。卷十八にあり、越中の役人が集まった秦岩竹官舎で開かれた酒宴のうちに、主が「百合の花蔓」を作って高坏に乗せて来賓に贈った。家持は、それを踏まえて「さ百合の花の笑まはしきかも」(四〇八六)、「さ百合の後も会はむと思へこそ」(四〇八八)とあり、同様に国守家持の館で開かれた久米広縄が朝集使の役を終えて帰国した宴で、「夏の野の さ百合の花の花咲に にぶに笑みて」(四一一六)とある。

宴席では伝統を踏まえた歌い方であるが、一方でなでしことゆりを「庭中の花」としていたことは、「いぶせみと 情慰に 石竹花を 屋戸に蒔き生し 夏の野に さ百合引き植多て」(四一一三)とあり、わざわざ野にあるゆりを移植している。ゆりは、笹百合と山百合の二種類が考えられているが、少納言時代も習作時代も興味を見せなかったのは、越中では花の大きな山百合であり、西国で一般的な笹百合であったからではない、とも想像される。それであれば、百合の花にも越中の風土に影響された家持がいることになる。

一方でなでしこは、越中でも庭に植えられていた。なでしこを「花妻」と比喩する家持である。これは、旅人の影響がある。旅人は、萩を鹿の花妻といい、同時に萩の花を二首よんでいる。

我が岡にさ雄鹿来鳴く初萩の花妻問ひに来鳴くさ雄鹿（八・一五四一）

我が岡の秋萩の花風をいたみ散るべくなりぬ見む人もがも（八・一五四二）

一方越中でなければ詠まれなかったであろう植物としては、あしつき、ほよ、つままがある。

雄神川紅にほふ娘子らし葦付「水松の類」取ると瀬に立たすらし（十七・四〇二二）

あしひきの山の木末のほよ取りてかざしつらくは千歳寿くとそ（十八・四一三六）

磯の上のつままを見れば根を延へて年深からし神さびにけり（十九・四一五九）

ちなみに習作時代と同様になでしこは、越中でもうたわれた。習作と越中をつなぐ花のなでしこは、四首うたわれた。しかし、相聞的な妹を連想させた花が、宴席で親しみを言うために比喻で用いる花となっている。

家持の越中での作歌は、習作時代の延長であると同様に、そしてそれを京都との対照から、その風土に対する興味として積極的に試みていたことは、その植物に注目しても知られる。越中でのみ詠まれた花、さらに家持だけが越中で取り上げた花、それらは家持の越中での作家生活である宴席と独詠で実現されたうたである。独詠では、すもも、かたかごが代表的な花であり、宴席では「春の花」とゆり等が代表的な花の歌詞となる。

三 少納言時代

家持が年少の頃から花好きであつたのであろう。また天平十八年の弟書持を悼む長歌で、

……はしきよし 汝弟の命 なにしかも 時しはあらむを はだすすき 穂に出づる秋の 萩の花 にほへるや
どを「言ふところは、この人、人となり花草花樹を好愛して多く寢院の庭に植ゑたり。故に花薫へる庭と謂ふ」
朝廷に 出で立ち平し 夕庭に踏み平げず 佐保の内の 里を行き過ぎ あしひきの 山の木末に 白雲に
立ちたなびくと 我に告げつる「佐保山に火葬す。故に「佐保の内の里を行き過ぎ」といふ。」(十七・三九五七)

と弟の花好きを描写している。

その弟同様に花好きであつたのは、家持の生涯にわたつたであらう。三十七歳の天平勝宝六年七月二十八日の作に、次の歌がある。

八千種に草木を植ゑて時ごとに咲かむ花をし見つつしのはな (二十・四三二四)

天平勝宝三年に都に戻ってから、家持は集中的に一人静に居て歌をうたう、或いは誰かに持続的に歌をうたつて贈答することがない。従つて、防人に同情して作つた天平勝宝七年の防人を詠む長歌三首(二十・四三三二、四三九八、四四〇八)は、例外的なことになる。植物は、難波の形容と結びつく「蘆」、妻の形容としての「若草」、父母と結び

つく「ちち」「ははそ」が用いられているが、慣用的なものである。

ちなみに少納言時代にのみ用いられている植物は、あしび、くず、たけ、たまばはき、はじ、ひかげ、むぐら、やまずげである。あしびとくず以外は、花というより植物という内容である。そして、その植物からは、たけに注目したい。たけは、万葉集で十八首にうたわれた。家持の二首はいずれも時期が重なる京での作である。

み園生の竹の林にうぐひすはしき鳴きにしを雪は降りつつ（十九・四二八六）

我がやどのいささ群竹吹く風の音のかそけきこの夕かも（十九・四二九一）

たけがうたわれたのは、天平勝宝五年一月と二月のことである。四二八六番は、家持三十六歳の正月十一日に作られた。一尺二寸も積もった大雪の日であり、題詞に「拙き懷を述べたる」（四二八五）とある三首の一首である。竹に鶯という組み合わせに興趣があるのであろう。そもそも竹の林が万葉集では珍しい。竹は、単独で用いられるのは、例がない。ほぼ同じ例は、梅花の宴に阿氏奥島が「わが園の竹の林」と詠んでいる一例だけであり、他は「さす竹の」「なよ竹の」「竹珠」などの例である。竹林など殊珍しいとも思われないが、竹の林と和語化したのであろう。その意味では、竹が日常生活と結びつくと思っていると、案外外来した植物であるのかもしれない。竹の林をさらに微細にしたのが「いささ群竹」であろう。竹の林ですら用例が二例しかないのであるから、四二九一番が絶唱と呼ばれるのは、素材的な意味でも特色がある。

この小さな固まりの竹群に、かそけき音を感じる鋭敏な心情とは、五感でとらえていることを指摘したい。耳、目などということでない、体全体が感覚になって感じているのである、と。

一方で、越中でもうたい、少納言として帰京してからもうたう共通の植物もある。まず取り上げたいのは、伝統によりながら、まつをうたう家持がいることである。

まづは、越中時代以前に三首でうたう。京に戻ってから、五首でうたわれた。防人歌の収集と防人に同情した歌を創作したために、難波と結びつくあしも四首が少納言時代にうたわれていて、それ以前の三首からみて多い数である。

まづは、万葉集でうたわれた歌が七十六首である。家持は、浜辺の松、或いは小松といった類や、赤松や黒松といった類にも興味を示さない。難波には、松枝も浜松もあつたであろうが、歌で見る限り、常磐の松をうたう。

天平十六年内舍人時代に、「松の枝を結ぶ情は長くとぞ思ふ」(六・一〇四三)と有間皇子の結び松を連想させる。

越中時代も、「松反りしひにてあれか」(十七・四〇一四)と人麻呂歌集にある「松反りしひてあれやは」を踏まえている。それは、常緑樹が変わるということから、役に立たない意味に用いたのであろう。これも鷹を逃がしたが、夢に出てきたので長歌を作った時に添えた短歌にある。越中は鳥に結びついて、ホトトギスの鳴く場所として「明け立たば 松のさ枝に」(十九・四一七七)とうたう。

少納言として都にもどってからは、「松が根の 絶ゆることなく」(十九・四二六六)という心情から、

はしきよし今日の主人は磯松の常にいまさね今も見ること(二十・四四九八)

八千種の花はうつろふ常磐なる松のさ枝を我は結ばな(同・四五〇一)

と、常緑樹の含み持つ永久にという気持ちと結びつく。

これは、松の伝統である永久を連想させるが、それを直接的に「磯松の常」「常磐なる松」と言う。何故こうなったのか言えば、橘を例外とし一首うたうので、その代わりにまつを使用したからである。橘の代わりにまつがうたわれたのである。

一方でやまたちばなも越中と京で登場している。家持は越中の天平勝宝二年と少納言の天平勝宝八年十一月とそれぞれうたう。それぞれ雪の日にうたわれている。

この雪の消残る時にいざ行かな山橘の実の照るも見む（十九・四二二六）

消残りの雪にあへ照るあしひきの山橘をつとに摘み来な（二十・四四七一）

家持の歌で官職を記している時と記していない時は、資料として基本的に区別すべきである。越中での作には、守とないのであるから、それなりに自由な歌である。積雪など珍しいとも思えないが、何かの感興があった。即ち、残雪に輝くやまたちばなを摘みたいという願いが生じたのである。もちろん、橘諸兄に対する希望もあって、天皇賛美の儲作歌（四二六六）で、松に天皇を、橘に橘諸兄を寓意させている家持三十五歳の天平勝宝四年の一例もある。

しかし、期待はあくまで実現しない。むしろ、藤原仲麻呂に圧倒される現実である。橘の代用にやまたちばなが用いられたのである。越中時代のやまたちばなが輝く実をもっていたのであるが、ここにあるのは残雪に照る赤い実であり、慎ましやかに六月の病氣してから、修道を願い、長寿を願い過ごしていた家持の内面的な一面がやまたちばなの二首を比較すると強い。「いざ行かな」と「つとに摘み来な」、或いは「実の照るも見む」と「雪にあへ照る」の違いは、さあ行くと希望として来るという、また実が照ると雪と比較して照りあっている、という表現の違いは、やま

橘に諸兄が寓意されているだけに一層四二六番は光がある。

家持は花はうつろふといい、それに対応する常磐なるものを提示する傾向が少納言として都に戻ってから強まる。

咲く花はうつろふ時ありあしひきの山菅の根し長くはありけり（二十・四四八四）

時の花いやめづらしもかくしこそ見し明め秋立つごとに（二十・四四八五）

この創作時期は橘奈良麻呂の謀反計画が発覚する前後の天平勝宝九年六月、乃至七月であろうが、事件後であるとはつきりしない。歌の配列からは、改元される秋以前であろうが、とにかく題詞もなく、左注（四四八六）に「右の一首は、大伴宿祢家持、物色の変化を悲怜びて作れり」とあり、また左注（四四八五）に「大伴宿祢家持作れり」とあるだけである。家持四十歳になっていた。恐らく事件発覚の後であろうが、題詞も無いところから誰に贈られたということより、独りの心情である。

「うつろふ」は、場所の移動にも用いられるが、一般的には万葉集では、花が散る、色があせる、変わる、といった意味で用いられる。家持独自の用い方としては、「春花のうつろふ」（十七・三九七八、三九八二）、「くれなゐはうつろふ」（十八・四一〇九）、「くれなゐもうつろふ」（十九・四一六〇）、「うめこの雪にうつろふ」（十九・四一八七）がある。

八千種の花はうつろふ常磐なる松のさ枝を我は結ばな（二十・四五〇一）

花がうつろうとして、同じ植物の山すげの根と常磐なる松が対照として登場する。花の命が短いのは藤原二郎の母への挽歌に「さく花の 時にうつろふ」(十九・四二二四)とあるので、越中時代にも用いているが、自分の命を含めてはかない命の比喻に花が用いられたのは、都に帰ってからである。

弟書持同様に、草花が好きだという家持であるが、最終的には人生、命を花に重ねつつ、永遠的な松などにあこがれたのである。一方、四四八五番は、時の花にますます心惹かれることをうたう。とすれば、花はどうなるのであるうか。この矛盾を中西進氏は「時の花を待った」として家持が橘奈良麻呂の乱に加わらない心情を見ている。^(注15)

家持は、三十四歳の天平勝宝三年十月から、平城京で作家活動をしている。都に戻ってからは、独詠というよりも、宴席で披露する歌が多い。従って、宴席の季節として春が多いのであろうが、創作した月と季節で分類して歌数を示す。

春

一月 五首

二月 三十首

三月 六首

夏

四月 六首

五月 四首

六月 七首

秋

七月 十二首

八月 二首

九月 〇首

月不明 六首

冬

十月 一首 十一月 八首 十二月 二首

月日不明 二首

これらから、二月の作が圧倒的に多いことが知られる。しかし、花に限って言えば、二月にうたわれる桜や桜を意味する「はな」が多く詠まれるわけではない。なでしことはぎが少納言時代にもうたわれた花である。さくらとなでしこは、次のように歌われている。

見渡せば向つ峰の上の花にほひ照りて立てるは愛しき誰が妻（二十・四三九七）

我が背子がやどのなでしこ散らめやもいや初花に咲きはますとも（二十・四四五二）

上記の二首は、天平勝宝七歳に二月と五月であり、作者は三十八歳である。そのころはといっても前年の七月の作であるが、花に対する興味をうたう。

八千種に草木を植ゑて時ごとに咲かむ花をし見つつしのはな（四三二四）

ところが、花に対する鑑賞態度が変化するのは、その翌年で家持三十九歳の八月に、

秋風の吹き抜き敷ける花の庭清き月夜に見れど飽かぬかも（四四五三）

と詠んでから、花はうつろうとして、「山菅の根」(四四八四)、「常磐になる松」(四五〇二)などの常緑樹としての松や地下に隠れている根などをうたう傾向が強まる。家持の伝記からは、橘諸兄辞任した天平勝宝八年二月、さらに同年五月の相伴古慈斐事件があった。三十五歳以降橘諸兄の失脚、さらに橘奈良麻呂の変のある四十歳になっていた天平勝宝九年六月までは、希望がわずかに残された日常であろう。天平宝字二年二月中臣清麻呂の宅で行われた宴で、花はうつろうとして、植物として、「たまははき(玉簪)」(四四九三)「うえき(植木)」(四四九五)などをそれまでうたに取り入れていた家持が「まつ」(四四九八、四五〇二)などをうたう。

花を心情的な好意、或いは擬人、さらにある人物の象徴としていたが、うつろう物としてからは、常緑樹の植物に共感するようになり、或いは根という普段地下にあつて人に見えない一部に興味を持っているのは、皇親政治に対する挫折に由来するのであろう。

結 び

家持の花を主体に考察した。これをまとめれば、和歌において花に対する風流を決定した歌人と言うことになる。これまでの繰り返しになるが、なでしこを擬人化させ、盛んに用いた最初の歌人の一人である。島田裕子は、なでしこが習作時代に花の可憐さが女性を連想させ、さらに越中・京では社交的な挨拶の花としていて、「私的な相聞歌から宴席歌へと場の変化の相を見る」ことができる」とする。^(註14)

越中でうたったほよ、かたかぎ、すももは、一首にのみに創作された。一方京師では繊細な「いささ群竹」に吹く

風に心を託した春愁の歌人である。また、橘諸兄を譬喩するたちばなを好み、父旅人の好んだうめを愛で、万葉の一般的な人と同じくさらに親しんだ歌人でもある。

大伴家持は、春愁の歌人と評価されている。花を主体にしている春愁といえ、天平勝宝二年に詠まれた絵画的なといわれ、一面の華やかさを表白していそうでありながら、次の「桃李」二首とたたか歌がその代表である。

春の園紅にほふ桃の花下照る道に出で立つ娘子（四一三九）

我が園の李の花か庭に散るはだれのいまだ残りたるかも（四一四〇）

もののふの八十娘子らが汲まがふ寺井の上の堅香子の花（四一四三）

そして、その評価には家持の花の歌の本質を貫くものがある。心のかげりを含みつつ美しく咲く花に対する興味も示していた。結論として注目したいのが、家持三十二歳の天平勝宝元年十二月に、

雪の上に照れる月夜に梅の花折りて贈らむ愛しき兒もがも（十八・四一三四）

とたたわれた歌である。

「雪月梅花（花）」を組み合わせた嚆矢である。「雪月花」の花が梅花になっているが、そもそも「花」とは、咲くものを指すのであろうから、梅も花と言うことになる。日本の文献では、この家持の題詞を雪月花の初出例としている。雪と梅、梅と月夜は、家持を含めてそれ以前にも歌の世界でしばしば試みられている。

雪と梅ということでは、大伴旅人がその代表である。天平二年に大宰府で開かれた梅花の宴でも三首（五・八二二、八二三、八四四）が梅と雪の組み合わせをうたう。梅と月（夜）ということでは、家持の一例を除き、四例（八・一四五二、一六六一、十・三三二五、二三五九）である。巻十の二例は、「花を詠める」ち「花に寄せたる」と題詞にあり、冬の雑歌と相聞に収められている。

月と雪は、万葉集では暦の月と雪に触れる例、長歌にたまたま雪が使われていても、ある一場面、或いはその歌の一瞬に関わる物としては、家持の一例だけである。ちなみに懷風藻では、雪、月を用いた詩は、荊助仁の「美人を詠む一首」に「洛浦廻雪霏ふ。月は泛かぶ眉間の魄。」とあって、洛水の神女のごとく雪に舞い、眉間の美しさは月の光のごとくである、という。或いは、境部王の「長王が宅にして宴す一首」に「上月淑光軽し。雪を送りて梅花笑み、霞を含みて竹葉清し。」とある上月とは、正月で月の光が軽やかになり、よって梅の花が開き、春霞によって竹が青々としている、ある。これは、秀麗な表現である。荊助仁も境部王も、直接雪見や、月見と関わるわけではないが、言葉として、月、雪が用いられている。

万葉集でも家持以外に、雪と月とが結びつく例が案外である。古今集三三二番の坂上是則歌に、雪と月の組み合わせがあるが、有明の月が出ているかと思間違う吉野の白雪であるというのであって、月が実際に景物として存在していたわけではない。神無月と雪は二例あるが、家持のごとく天体の月と雪の組み合わせは、古今集にもない。花、そして雪と月の組み合わせたところにすぐれた歌人であった資質を認めたい。

また、今回触れなかったが、花薫りにも興味を示していて、その意味でも古今的な歌も創作していることを指摘しておきたい。家持歌では、香りをうたう歌として、三九一六番（たちばな）、三九五七（はぎの花）、三九六五番（春の花）、四二二番（たちばな）、四二二〇番（かづら）、四二六九番（花たちばな）、四一九二番（ふだち）、四五二二番

(あしび)があつた。とりわけ「扱き入れ」などの表現は、袖の香りために花を扱き入れたのである。家持独自の花の味わい方であり、平安時代の袖の香を連想させる歌の誕生である。^(注15)

注

- (1) 『草木万葉歌帖(二)』(「叔德国文」二十七号)
- (2) 『万葉植物事典』(クレオ) 一二六頁
- (3) 『藤波の影―大伴家持の作歌精神について―』(九州大谷国文) 十三号
- (4) 『万葉の萩』(福山市立女子短大紀要) 十八号
- (5) 『家持となでしこ―『やまととなでしこ』の源泉の歌』(「都留文科大学大学院紀要」七号)
- (6) 『万葉集注釈(十九)』では、四七七番の桜の比喩を「年僅か十七歳で薨去された皇子を悼む言葉としてふさわしい」(六四九頁)述べ、さらに安積皇子第二長歌の反歌四八〇番について「私注の後年の佳作を思わせる調子の緊密を見る」(六五九頁)と述べている。
- (7) 橋本四郎氏「ねりのむらと」(「万葉」八十七号)
- 坂本信幸氏『諸弟らが練の村戸』―歌と人名―(「万葉」九十六号)
- 『万葉集釈注(二)』(六八三から六八四頁)では、「諸弟」を使者の名前かとして、「練りのむらと」を練りに練った巧みな発言、としている。

『万葉集全歌講義(二)』(七九二から七九三頁)で「諸弟」は、名前として、「練りのむらと」は七七四番に

「ことば」があるので、それに対応するために「心・魂胆」の意味を考えている。

- (8) 『大伴家持(2)』 一七九頁
- (9) 「春花の 貴くあらむと」(『香川大学国文研究』 十九号)
- (10) 中西氏『大伴家持(4)』 二九三から二九四頁
- 大越氏「家持の李花の歌」(『四国大学紀要』 人文社会科学編 四号)
- (11) 「万葉の柳」(『甲南国文』 二十九号)
- (12) 「万葉タチバナ歌考」(『常葉国文』 二十七号)
- (13) 『大伴家持(6)』 三〇二頁
- (14) 「大伴家持と〈なでしこ〉の花」(『梅光女学院大学日本文学研究』 二十九号)
- (15) 「大伴家持歌の特質―花の香りをうたう―」(『広島女学院大学日本文学』 十九号)

万葉の雪歌

巻	番号	作 者
1	25	天武天皇
	26	天武天皇
	45	柿本人麻呂
	65	長皇子
2	103	天武天皇
	104	藤原夫人
	199	柿本人麻呂
	203	穗積皇子
3	261	柿本人麻呂
	262	柿本人麻呂
	299	旅人か安麻呂か
	317	山部赤人
	318	山部赤人
	319	高橋虫麻呂
	320	高橋虫麻呂
	382	丹比国人
	383	丹比国人
	385	
4	624	聖武天皇
5	822	大伴旅人
	823	大伴百代
	839	田氏真上
	844	小野国堅
	849	大伴旅人か
	850	大伴旅人か
6	892	山上憶良
	1010	橘奈良麻呂
	1041	
7	1174	
	1293	人麻呂歌集
	1349	
8	1420	駿河采女
	1426	山部赤人
	1427	山部赤人
	1434	大伴三林
	1436	大伴村上
	1439	中臣武良自
	1441	大伴家持
	1445	大伴坂上郎女
	1636	舎人娘子
	1639	大伴旅人
	1640	大伴旅人
	1641	角広弁
	1642	安倍奥道
	1643	若桜郡君足
	1645	巨勢宿奈麻呂
	1646	小治田東麻呂
	1647	忌部黒麻呂
	1648	小鹿女郎
	1649	大伴家持
	1650	
	1651	大伴坂上郎女
	1654	大伴坂上郎女
	1655	三国人足
	1658	光明皇后

巻	番号	作 者
8	1659	他田広津娘子
	1662	大伴田村大嬢
	1663	大伴家持
9	1695	
	1709	人麻呂歌集
	1782	人麻呂歌集
	1786	笠金村
10	1832	
	1833	
	1834	
	1835	
	1836	
	1837	
	1838	
	1839	
	1840	
	1841	
	1842	
	1848	
	1849	
	1862	
	1888	
	2132	
	2312	人麻呂歌集
	2313	人麻呂歌集
	2314	人麻呂歌集
	2315	人麻呂歌集
	2316	
	2317	
	2318	
	2319	
	2320	
	2321	
	2322	
	2323	
	2324	
	2329	
	2331	
	2333	人麻呂歌集
	2334	人麻呂歌集
	2337	
	2338	
	2339	
	2340	
	2341	
	2342	
	2343	
	2344	
	2345	
	2346	
	2347	
	2348	
11	2729	
12	3153	
13	3280	

巻	番号	作 者
13	3293	
	3294	
	3310	
	3324	
14	3351	
	3358(一本)	
	3423	
16	3805	
17	3906	大伴書持
	3922	橘諸兄
	3923	紀清人
	3924	紀男梶
	3925	葛井諸会
	3926	大伴家持
	3960	大伴家持
	4000	大伴家持
	4001	大伴家持
	4003	大伴池主
	4004	大伴池主
	4011	大伴家持
	4016	高市黒人
18	4024	大伴家持
	4079	大伴家持
	4106	大伴家持
	4111	大伴家持
	4113	大伴家持
	4116	大伴家持
	4134	大伴家持
19	4140	大伴家持
	4226	大伴家持
	4227	三形沙弥
	4228	三形沙弥
	4229	大伴家持
	4230	大伴家持
	4231	久米広縄
	4232	蒲生娘子
	4233	内蔵縄麻呂
	4234	大伴家持
	4281	大伴家持
	4282	石上宅嗣
20	4283	茨田王
	4285	大伴家持
	4286	大伴家持
	4287	大伴家持
	4288	大伴家持
	4298	大伴千室
	4370	大舎人部千文
	4439	石川郎女
	4454	橘諸兄
	4471	大伴家持
	4475	大原今城
	4488	三形王
	4516	大伴家持

万葉の月歌

巻	番号	作 者
1	8	額田王
	15	天智天皇
	48	柿本人麻呂
	79	
2	135	柿本人麻呂
	161	持統天皇
	167	柿本人麻呂
	169	柿本人麻呂
	196	柿本人麻呂
	207	柿本人麻呂
	211	柿本人麻呂
	214	柿本人麻呂
	220	柿本人麻呂
3	240	柿本人麻呂
	289	間人大浦
	290	間人大浦
	302	安倍広庭
	317	山部赤人
	388	
	393	沙弥満誓
	442	膳部王
	495	田部櫨子
	565	賀茂女王
4	571	大伴四綱
	623	池辺王
	632	湯原王
	667	大伴坂上郎女
	670	湯原王
	671	
	702	河内百枝娘子
	709	大宅女
	710	安都屋娘子
5	735	坂上大嬢
	736	大伴家持
	765	大伴家持
	800	山上憶良
	892	山上憶良
6	980	安倍虫麻呂
	981	大伴坂上郎女
	982	大伴坂上郎女
	983	大伴坂上郎女
	984	豊前国の娘子
	985	湯原王
	986	湯原王
	987	藤原八束
	993	大伴坂上郎女
	994	大伴家持
7	1008	忌部黒麻呂
	1039	高丘河内
	1068	人麻呂歌集
	1069	
	1070	
	1071	
	1072	
	1073	
	1074	
	1075	
7	1076	
	1077	
	1078	
	1079	
	1080	
	1081	
	1082	

巻	番号	作 者
7	1083	
	1084	
	1085	
	1086	
	1179	
	1270	古歌集
	1294	人麻呂歌集
	1295	
	1372	
	1373	
8	1452	紀女郎
	1480	大伴書持
	1507	大伴家持
	1508	大伴家持
	1552	湯原王
	1569	大伴家持
	1596	大伴家持
	1661	紀女郎
	1691	
	1701	
9	1712	
	1714	
	1719	
	1761	
	1763	
	1807	
10	1874	
	1875	
	1876	
	1887	
	1889	
	1943	
	1953	
	2010	人麻呂歌集
	2025	人麻呂歌集
	2043	
10	2051	
	2131	
	2202	
	2223	
	2224	
	2225	
	2226	
	2227	
	2228	
	2229	
10	2298	
	2299	
	2300	
	2306	
	2325	
	2332	
	2349	
11	2353	人麻呂歌集
	2420	人麻呂歌集
	2450	人麻呂歌集
	2460	人麻呂歌集
	2461	人麻呂歌集
	2462	人麻呂歌集
	2463	人麻呂歌集
	2464	人麻呂歌集
	2500	人麻呂歌集
	2512	人麻呂歌集
11	2618	

巻	番号	作 者
11	2664	
	2665	
	2666	
	2667	
	2668	
	2669	
	2670	
	2671	
	2672	
	2673	
12	2679	
	2811	
	2820	
	2821	
	3002	
	3003	
	3004	
	3005	
	3006	
	3007	
13	3008	
	3169	
	3207	
	3208	
	3231	
	3234	
	3245	
	3246	
	3276	
	3324	
14	3395	
	3565	
	3599	
	3611	柿本人麻呂
	3622	
	3623	
	3650	
	3651	
	3658	
	3671	
15	3672	
	3698	
	3803	
	3900	大伴家持
	3955	土師道良
	3988	大伴家持
	4029	大伴家持
	4054	大伴家持
	4060	粟田女王
	4072	大伴家持
16	4073	大伴池主
	4076	大伴家持
	4134	大伴家持
	4160	大伴家持
	4166	大伴家持
	4177	大伴家持
	4181	大伴家持
	4192	大伴家持
	4206	大伴家持
	4254	大伴家持
17	4311	大伴家持
	4413	大伴部真足女
	4453	大伴家持
	4486	大炊王
	4489	甘南備伊香
18	4311	大伴家持
	4413	大伴部真足女
	4453	大伴家持
	4486	大炊王
	4489	甘南備伊香
19	4311	大伴家持
	4413	大伴部真足女
	4453	大伴家持
	4486	大炊王
	4489	甘南備伊香
20	4311	大伴家持
	4413	大伴部真足女
	4453	大伴家持
	4486	大炊王
	4489	甘南備伊香

巻	番号	歌	頁
19	4192	桃の花 紅色に にほひたる 面輪のうちに (略)	47,58
	4226	この雪の消残る時にいざ行かな山橘の実の照るも見む	27,88
	4229	新しき年の初めはいや年に雪踏み平し常かくにもが	33
	4230	降る雪を腰になづみて参り来し験もあるか年の初めに	33
	4235	鳴く鶏はいやしき鳴けど降る雪の千重に積みこそ我が立ちかてね	33
	4254	秋津島 大和の国を 天雲に 磐船浮かべ (略)	78
	4255	秋の花種々にあれど色ごとに見し明らむる今日の貴さ	78
	4281	白雪の降り敷く山を越え行かむ君をそもとな息の緒に思ふ	33
	4285	大宮の内にも外にもめづらしく降れる大雪な踏みそね惜し	35
	4286	み園生の竹の林にうぐひすはいやしき鳴きにしを雪は降りつつ	35,86
	4287	うぐひすの鳴きし垣内ににほへりし梅この雪にうつろふらむか	35
	4288	川渚にも雪は降れし宮の内に千鳥鳴くらし居む所なみ	35
	4291	我がやどのいささ群竹吹く風の音のかそけきこの夕かも	86
20	4311	秋風にいまかいまかと紐ときてうらまちをるに月かたぶきぬ	61
	4312	秋草に置く白露の飽かずのみ相見るものを月をし待たむ	39,61
	4314	八千種に草木を植ゑて時ごとに咲かむ花をし見つつのほな	85,91
	4397	見渡せば向つ峰の上の花にほひ照りて立てるは愛しき誰が妻	91
	4448	あぢさゐの八重咲くごとく八つ代にをいませ我が背子見つつ思はむ	75
	4451	我が背子がやどのなでしこ散らめやもいや初花に咲きはますとも	91
	4453	秋風の吹き抜き敷ける花の庭清き月夜に見れど飽かぬかも	66,91
	4471	消残りの雪にあへ照るあしひきの山橘をつとに摘み来な	27,62,88
	4484	咲く花はうつろふ時ありあしひきの山菅の根し長くはありけり	89
	4485	時の花いやめづらしもかくしこそ見し明めめ秋立つごとに	89
	4488	み雪降る冬は今日のみうぐひすの鳴かむ春へは明日にしあるらし	14
	4489	うちなびく春を近みかぬばたまの今夜の月夜霞みたるらむ	14
	4490	あらたまの年行き帰り春立たばまづ我がやどにうぐひすは鳴け	15
	4492	月よめばいまだ冬なりしかすがに霞たなびく春立ちぬとか	15
	4498	はしきよし今日の主人は磯松の常にいまさね今も見ると	87
	4501	八千種の花はうつろふ常磐なる松のさ枝を我は結ばな	87,89
	4512	池水に影さへ見えて咲きにほふあしびの花を袖に扱入れな	63
	4516	新しき年の初めの初春の今日降る雪のいや頻け吉事	36,37
古今集	さつきまつ花橘の香をかげばむかしの人の袖の香ぞする (一三九)		64
	もみち葉は袖にこきいれてもていでなむ秋は限りと見む人のため (三〇九)		64
	あさばらけ有明けの月と見るまでに吉野の里に降れる白雪 (三三二)		3
和漢朗詠集	しらしらしらけたるとし月影に雪かきわけて梅の花をる (八〇四)		4

巻	番号	歌	頁
8	1663	沫雪の庭に降りしき寒き夜を手枕まかずひとりかも寝む	25
10	1853	梅の花取り持ちて見れば我がやどの柳の眉し思ほゆるかも	47
	1862	雪見ればいまだ冬なりしかすがに春霞立ち梅は散りつつ	30
11	2353	初瀬の弓櫓がしたにわが隠せるその妻あかねさす照れる月夜に人見てむかも	49
	2464	三日月のさやにも見えす雲隠り見まくそ欲しきうたてのころ	46
17	3900	織女し舟乗りすらしまそ鏡清き月夜に雲立ち渡る	51
	3922	降る雪の白髪までに大君に仕へ奉れば貴くもあるか	20
	3923	天の下すでに覆ひて降る雪の光を見れば貴くもあるか	20
	3924	山の峽そことも見えず一昨日も昨日も今日も雪の降れば	20
	3925	新しき年のはじめに豊の年しらすとならし雪の降れりは	20
	3926	大宮の内にも外にも光るまで降らす白雪見れど飽かぬかも	32
	3957	天離る 鄙を治めにと 大君の 任のまにまに (略)	85
	3960	庭に降る雪は千重敷く然のみに思ひて君を我が待たなくに	26
	3965	春の花今は盛りにほふらむ折りてかざさむ手力もがも	77
	3966	うぐひすの鳴き散らすらむ春の花いつしか君と手折りかざさむ	77
	3988	ぬばたまの月に向かひてほととぎす鳴く音遙けし里遠みかも	55
	4000	天さかる 鄙に名かかす 越の中 国内ことごと (略)	23
	4001	立山に降り置ける雪を常夏に見れども飽かず神からならし	23
	4002	片貝の川の瀬清く行く水の絶ゆることなくあり通ひ見む	23
	4021	雄神川紅にほふ娘子らし葎付〔水松の類〕取ると瀬に立たすらし	84
	4024	立山の雪し消らしも延槻の川の渡り瀬あぶみ漬かすも	31,37
	4029	珠洲の海に朝開きて漕ぎ来れば長浜の浦に月照りにけり	58,65
	4060	月待ちて家には行かむわが挿せるあから橘影に見えつつ	50
18	4054	ほととぎすこよ鳴き渡れ燈火を月夜になそへその影も見む	57
	4073	月見れば同じ国なり山こそば君があたりを隔てたりけれ	60
	4076	あしひきの山はなくもが月見れば同じき里を心隔てつ	60
	4079	三島野に霞たなびきしかすがに昨日も今日も雪は降りつつ	31
	4097	すめろきの御代栄えむと東なる陸奥山にくがね花咲く	81
	4111	かけまくも あやに恐し 皇神祖の 神の大御代に (略)	21,82
	4112	橘は花にも実にも見つれどもいや時じくになほし見が欲し	82
	4134	雪の上に照れる月夜に梅の花折りて贈らむ愛しき児もがも	1,37,65,93
	4136	あしひきの山の木末のほよ取りてかざしつらくは千歳寿くとそ	84
19	4139	春の園にほふ桃の花下照る道に出で立つ娘子	79,93
	4140	我が園の李の花か庭に散るはだれのいまだ残りたるかも	79,93
	4141	春の日に萌れる柳を取り持ちて見れば都の大路し思ほゆ	79
	4143	もののふの八十少女らが汲みまがふ寺井の上のかたかごの花	79,93
	4159	磯の上のつままを見れば根を延へて年深からし神さびにけり	84
	4181	さ夜ふけて暁月に影見えて鳴くほととぎす聞けばなつかし	58

和歌引用索引

巻	番号	歌	頁
1	8	熟田津に舟乗りせむと月待てば潮もかなひぬ今は漕ぎ出でな	39
	25	み吉野の 耳我の嶺に 時なくそ 雪は降りける (略)	16
2	103	我が里に大雪降り大原の古りにし里に降らまはくは後	17
	104	我が岡のおかみに言ひて降らしめし雪の碎けしここに散りけむ	17
	169	あかねさす日は照らせれどぬばたまの夜渡る月の隠らく惜しも	57
3	262	やすみしし 我が大君 高光る 日の皇子 (略)	33
	317	天土の 分かれし時ゆ 神さびて 高く貴き (略)	18
	318	田子の浦ゆうち出でて見ればま白にそ富士の高嶺に雪は降りける	18
	408	石竹のその花にても朝な朝な手に取り持ちて恋ひぬ日無けむ	72
	464	秋さらば見つづゑへと妹が植ゑしやどのなでしこ咲きにけるかも	72
	477	あしひきの山さへ光り咲く花の散りぬるとき我が大君かも	74
4	562	暇無く人の眉根をいたづらに搔かしめつつも逢はぬ妹かも	46
	736	月夜には門に出で立ち夕占問ひ足占をそせし行かまくを欲り	49
	765	一重山隔れるものを月夜良み門に出で立ち妹か待つらむ	49
	773	言問はぬ木すらあぢさゐ諸弟らが練りのむらとに欺かれけり	75
	774	百千度恋ふと言ふとも諸弟らが練りの言葉は我は頼まじ	1,75
5	822	我が園に梅の花散るひさかたの天より雪の流れ来るかも	28
	823	梅の花散らくはいづくしかすがにこの城の山に雪は降りつつ	29
6	981	獵高の高円山を高みかも出で来る月の遅く照るらむ	44
	982	ぬばたまの夜霧の立ちておほほしく照れる月夜の見れば悲しさ	44
	983	山のはのささらえをとこ天の原門渡る光見らくし良しも	44
	993	月立ちてただ三日月の眉根搔き日長く恋ひし君に逢へるかも	45
	994	振り放けて三日月見れば一目見し人の眉引き思ほゆるかも	45,65
	1009	橘は実さへ花さへその葉さへ枝に霜置けどいや常葉の木	82
8	1424	春の野にすみれ摘みにと来しわれそ野をなつかしみ一夜寝にける	49
	1441	うち霧らし雪は降りつつしかすがに我家の園にうぐひす鳴くも	28
	1448	我がやどに蒔きしなでしこいつしかも花に咲きなむなそへつつ見む	72
	1480	我がやどに月おし照れりほととぎす心あれ今夜来鳴きとよもせ	56
	1507	いかといかと あるわが屋前に 百枝さし 生ふる橘 (略)	52
	1508	十五夜隆ち清き月夜に我妹子に見せむと思ひしやどの橘	50
	1541	我が岡にさ雄鹿来鳴く初萩の花妻問ひに来鳴くさ雄鹿	84
	1542	我が岡の秋萩の花風をいたみ散るべくなりぬ見む人もがも	84
	1596	妹が家の門田を見むとうち出で来し心も著く照る月夜かも	48
	1624	我が業なる早稲田の穂立作りたる縋そ見つづゑはせ我が背	73
	1625	我妹子が業と作れる秋の田の早稲穂の縋見れど飽かぬかも	73
	1649	今日降りし雪に競ひてわが屋前の冬木の梅は花咲きにけり	25

執 筆 者

森 斌 (広島女学院大学教授)

広島女学院大学総合研究所叢書 第5号

2009年12月15日 印刷

2009年12月21日 発行

発 行 者 森 あ お い

発 行 所 広島女学院大学総合研究所
〒732-0063
広島市東区牛田東4-13-1
TEL (082)228-0386

印 刷 所 (有) と き 印 刷
〒730-0052

(非売品) 広島市中区千田町3丁目3番2号
TEL (082)245-0843